

東京立正女子短期大学

論 叢

第 三 卷

一 目 次

学長就任記念講演

人倫の複合弁証法的発展としての歴史

岩 本 経 丸 1

—現代科学技術の揚棄について—

小説「海軍」について

近 藤 久 美 子 17

日蓮における女性の救済

中 尾 堯 25

法華経藥王菩薩本事品と六朝の捨身

岡 本 天 晴 30

菩薩像の円形肩飾りについて

田 所 政 江 35

文型練習におけるチャート使用法

田 島 富 美 江 8

On “The Navy” by Toyoo Iwata

近 藤 久 美 子 1

昭和四十六年

学長就任記念講演

人倫の複合弁証法的発展としての歴史

現代科学技術の揚棄について

第二代学長 岩 本 経 丸

序言 本能・知性・知見への弁証法的発展

(一)

人間の根本的特質は何かについては、古代から哲学が、現代では人間の科学が問いつづけ、また、人間はどのように明日をきずいたらよいかについては、未来学が成立して、現代の回答を出そうと努力を始めました。

前史における人類は、北京原人ジャワ猿人の当時から直立歩行し、手ができ、何かの道具を用い、つくり、既に火をも使っていたと想像されます。また、人類は無毛性であるので、着物を着たり脱いだりして、寒暑の両面にたえ、各地帯に定住し、定住によって習俗や文化をつくり、さらにはまた自らつくった習俗と文化を利用して、絶えない向上発展の道をたどってきました。人類は、一般動物にはないこのような独得の適応の仕方をしてきたが、それは知性にもとずくと考えられます。正にこの「知性」(intel-

ligence)こそは一般動物の本能をそのままとしては否定しながら、しかもより高次の段階においてこれを肯定し、一層意義あるものとして生かし、もって人類をして人類たらしめてきたものであります。この講演の目的とするところは、本能を揚棄する(aufheben)知性そのものの本性をさぐり、さらに知性そのものの内部においてもまた弁証法的発展が行われて現段階に至った経路をたどることがその一つであります。そしてここでもまた一つの揚棄を経過しなければならない「現代」に到達したことを解明し、現代的知性、言いかえれば、現代科学とその申し子である現代技術を揚棄するものが「知見」であることを弁証しようとするのが、第二の、しかもその主とする目的であります。

(二)

知性は、一般に直観的知性と思弁的知性に分類されるが、この二つの関係は併列的な横の関係ではなくて、縦の発展的、歴史的関係から始まり、

現況において併行的存在になったと推測されます。

宇宙の見えない手によって人類に与えられた知性は、その原初においては無意識の中で、触発に応じて直感的に機能していました。そして直感的知性は悟性 (Understanding, Verstand) を呼び醒まし、悟性は概念を形成し、これに基づいて判断と推論を行う精神活動の基礎的条件が育ってきました。この発達段階で思弁的知性の発生と発達が起こってくると考えられます。

人類の知性発達の跡は、正に今述べたような経路をたどってきました。すなわち、シュペングラーが指摘しているように、(これは次に述べるところであります)、直感的に反応する「眼」を輝やかせつつ「手」を活動させてきた原初的人类は、次第に概念の符号としてのことばをつくり、ことばは計画を立てる要具となり、「ことばと計画」(Sprechen und Unternehmen) の第二発達段階に到達します。ここに至って、悟性能力は拡大し、概念や概念の新生・再生・連合による思考活動が起こり、社会化や集住 (Synoikismos) が進み、農耕の技術が発展し、決定的なものとして文字が発明されるに至ります。ここに第三段階の古代高度文化に支えられた古代国家の発達時代を迎え、その首長である神王・司祭王・三皇五帝のような、部族ないしは民族の権威や徳望を持つ者をめぐって神話が形成せられ、神話はさらに次の発展を生むのであります。私は、このような原初的人类において無意識的に直感的に触発した知性を「無意識的知性」と名づけ、人類の発生から古代高度文化の発展までの時代を「無意識的知性の機能時代」と呼ぶことにします。

(三)

さて、重要なのは神話の本質であります。神話の中に現われる神々は、実に、人類がはじめてつくった人格的像であります。また物語りの内容は、神王や司祭王の正当性や合理性の弁証であり、また前史時代の諸部族間一般の社会的秩序の規範を示すものでもあります。すなわち神話の中には素朴ながら思弁的知性の芽を見ることができると言ってもよいでしょう。こういう時代の一つの山が正にホメロス期であり、これにつづいてヤスパースのいう「枢軸時代」(Axenzeit) が訪れます。枢軸時代は、この思弁的知性の所産が歴史の表面に出現してきた時代に外なりません。

思弁的知性は、一般には「理性」(Reason, Vernunft) と呼ばれ、さらにこの理性は、理念的理性と実践的理性の両面を持ちます。この理念的理性 (純理論的知性) は、既に悟性がつくった数々の概念を再生させながら、現存在 (Dasein) や自然に触発して、それ等の本質についての形而上学的究明を始めてきます。私は、このように、何かに触れる度毎に再生する知性を交じえて、理性的に思考する知性を「前意識的知性」と名づけ、ヤスパースの言う「枢軸時代」から、キリスト教による全ヨーロッパ支配の続いた中世の終りまでを「前意識的知性の機能時代」と呼ぶことにします。

(四)

さて、キリスト教によるヨーロッパ世界の千年に及ぶ普遍的支配は、教会制度の老化と信仰の形式化のために衰亡に向います。代って学芸復興と宗教改革運動が進行するに及んで、世界史に未だかつてなかったような知性活動がヨーロッパ世界に始まりました。触発して受動的に出てくる知性ではなく、自らを意識して能動的に働きかけていく知性——言いかえれば、理念的ないし実践的知性の推理としてではなく、各領域ごとに経験や実証

によってつくられた無数の知識をそれぞれの体系にまとめ、この知識体系によって人間や自然に向って所嫌わずアタックしていく知性活動が起ってきたのです。言うまでもなく自然科学であります。そして、この自然科学の現実的実際的成果が絶大であるがために、一切の精神的学問の方法にまで自然科学的方法が取り入れられ、世は正に科学万能時代となり、宗教、哲学、倫理学、道徳の影は薄れる程になりました。私は、この知性を「意識的知性」と名づけ、学芸復興期から現代に至る時代を「意識的知性の活動時代」と呼ぶことにします。ここで機能時代と言わないで、活動時代としたのは、触発に応じて全人的に働く知性、言いかえれば、人間性に内在する調和した能力としての知性ではなくて、人間の外につくられた方法的知性のメカニズムとして、また、人間の自由を許さない必然的現実を強要するものとして、独走している知性活動であるので、かく使い分けをする次第です。

この講演内容は、ゲーテ、ニーチェ、シェンケングラマー等の生の哲学者達の業績ならびにそれ等に関する諸研究、次にハイデッガー、ヤスパース、ブーバー、マルセル等の実存哲学とそれ等をめぐる諸業績、第三にトフラー、エリクソン、ドラッカー等の文明批評ないし未来学者達の諸説、第四に聖書、法華経等宗教書、第五に科学技術の裏面史としてのファウスト文献史料等に多くよっています。いちいち出典をあげないが、しかし、講演内容を印刷するに当たっては、しばしば引用し、話題にあげる文献だけは次に示し、引用場所を示す必要がある場合には、文献名の頭書の番号、その巻数、頁数を書くことにしました。

しばしば引用する主要文献名

1. Spengler, Oswald (1883~1936):
Untergang des Abendlandes, 2Bde. München 1922.
 2. Spengler, Oswald (1883~1936):
Der Mensch und die Technik, München 1932.
 3. Jaspers, Karl (1883~1969):
Vom Ursprung und Ziel der Geschichte, München 1964.
 4. Buber, Martin (1878~1964):
Gesammelte Werke. 1. Band. Schriften zur Philosophie.
München 1962.
 5. 小林一郎著、久保田正文増補：
法華経大講座、全12巻、日新出版、昭和40年。
 6. 聖書：旧約ならびに新約。
- 註① なお、用語の概念は、広辞苑(岩波)、新仏教辞典(中村元監修)、新倫理辞典(創文社)、岩波小辞典中の心理学及び哲学、法華辞典(編集代表者岡田教篤—「本学園創立者」)等に極力従いました。
- (2) 上記文献以外の人名には原則として在世年代、及び、欧文名をつけました。
 - (3) 1. は1000頁を越す大著、この邦訳は最近完成、五月書房出版。3. は「歴史の起源と目的」として理想社刊。4. 中の Ich und Du は近く創文社より出る予定。2. の邦訳はまだありません。

1. 無意識的知性の機能時代——神々との出会い

人間についての本質的問題が問われるとき、人類は何時、何所で発生したかが問われがちです。しかしそれは大したことではなく、大切なのは、人類を人類たらしめた根本的条件が何んであるか、それがどのように成長したかを把握することにあります。シュペングラーの考えを借りるならば、それは直立歩行であり(2の二八頁)、ここから展開する知性の発展であります。生物の潜在知性の要請は、人類に直立歩行を教え、直立歩行は逆に知性発展の決定的要因をつくり出していきます。すなわち、直立した生物は、比較的重く大きい大脳を入れた頭部を支えた上に、測遠儀の原理と同じ理にもとづく正確な眼を前額の正面に具え、前肢を独得の多芸多能な手に改変し得たという三つの利点によって、地上第一のすばらしい才能を開いたのであります。これをコムピューターにたとえるならば、重い大脳は優れたハードウェアであり、眼と手は絶妙なソフトウェアの役目を演じています。

人類の大脳のハードウェア的性能については、現代の大脳生理学と精神分析学が解明しつつありますが、眼と手のソフトウェア的性能についての分析を行ったのは、第一次大戦直後に出版されたシュペングラーの「西洋の没落」と同じ著者による「人間と技術」の外にはまだないようです。私はこの二著の内容を極めて高く評価しています。

まず人類の眼であるが、直立によって視点を高めたことによって著しく視野を拡大し、二眼が前額に横に正しく並んだので測遠儀と同様に距離を正確に判定し、この目によって始めて第三ディメンションの世界が開かれたと言ってよいでしょう。人類は、かくして広く深い世界をつくったのです。世界像とは、眼によって支配された外界に外なりません。

人類独得のこの「眼」は、音、におい、温度、流れ、動き等として入ってくる諸情報の根源を確かめ、分析し、鋭く見きわめます。これに基づいて大脳は行動を決定し、命じます。そして、その経過を監視し、必要とあればフィードバックを策するものこの眼です。また、人類独得の行動として、特にこの眼を閉じて考えることができるが、この時には、一瞬の間に人類はその全経験を中心に浮べることができるのです。すなわち、人類独得の精緻な眼は、刮目すれば万象を見きわめ、瞑目すれば自己の精神活動の全面を思い浮べるところの心眼を開くのです。実にこの眼は、長い時間の経過の中で、深遠な理論的理性の根源能力を開いて行くのであります。

さて次に「手」です。手は、道具をつくり、これを使い、技術の基本を開いたとは、既に言い古されてきました。それ以後に見逃してならないのは、手が、支え持つことによって軽重をはかり、その本質を考え、触れることによって温冷・硬軟・遅速・多少・粗密を知り、さらに両手をひろげることによってバランスを取り、振ることによって司令し、服従し、同意し、歓迎し、拒否する等の意志を表示し、その他各種の信号を送ってコミュニケーションの役をもちたことです。また、握手し、拍手し、愛撫する手となり、反対に、懲罰の答を揚げ、活人殺人の二つの剣をかざす手ともなります。実に手の活動とその経験の積み上げから、人類の実践的知性を発生させる根源が開かれたと想像されます。

生物の世界に突然変異として現われてきたと推測される人類のこれ等の特徴は、形態的には「眼と手」によって生じた新しい生活様式の発生と成長であり、内面的には眼による理論的知性と手による実践的知性の二つの萌芽の発生であります。人類の無意識的知性の機能した時代の第一期は

「眼と手の時代」でありました。

(二)

再びシュペングラのことは借りるならば、「時代を画する第二の変化が登場します。まことに突然にかつ強力に、只今述べてきたような意味での全くの突然変異が、人類の運命を根本から変革するものとして」(二の三十七頁)表われてきます。それは「話すことと計画すること」(Sprechen und Untenehmen)の発生ですが、一言にまとめて言えば「ことば」の発生と成長です。

宇宙意志による第二の突然変異の担当者はホモサピエンス(homo sapiens)です。彼等は各種の器物の製作、耕作と動物飼育、小屋がけ等の跡を残しているが、変ったのはこのような「物」ではなくて、人間であることに注意しなければなりません。すなわち、このような出土品が作られるのには、「技術的思考と方法」(das technische Denken und Verfahren)が先行していなければならず、この技術的思考と方法を可能にするためには「話すことと計画すること」(1の2巻、2章1)が前提になければなりません。この第二の時代を画する変化は、ことばの発生と成長に外ならないのであります。

ことばの発生の前には、目くばせ、身振り、警戒や脅迫の叫びが先行していたと考えられるが、その証拠は、今日のインドジャーマン語族に共通に残っている調子、アクセント、命令符や疑問符等です。文としての最初の表現は、原始詩歌、叙情詩、祈禱であり、続いて起る最も重大なものが神話の形成であります。神話は、前史における人類の内面的特性を知る上に最も重要な資料として、特に後で触れることにします。

ことばは、まず事象や心象を、次にはこの性質・行動・運動を、第三に行動や運動の時・場所・方法・原因等の状況や数等をあらわす名称ないし符号であり、言いかえれば、各種の概念形成であります。これを逆に言えば、次第に複雑になる精神活動の内容が分析され、分類され、整理されて、人類の知性の中で体系化され、しかもそれがダイナミックに機能し出したことを意味します。かくしてことばは、知性の活動の、特にコミュニケーションの要具となるとともに、次第に系統立った思想を表現するものに発展していきます。

(三)

「話すことと計画すること」が生んだ最も重大な技術上の成果は農耕法の発明と改良でありました。農耕法の発達の中では、集住(Synokismos)が進み、動物の飼育が始まり、特に乗馬が調教されて交通革命を起こし、駄載用の駱駝によって交易が盛んになり、これ等を併せて戦争の規模と機動半径が増大し、戦術が一変を始めます。

こういう時点において、三度画期的な現象が発生します。それは約六千年前と判断されるエジプトで文字が発明されたことです。ことばによって、その当座に行われた伝達は、文字によって、時を経た後にもまた離れた場所に対しても可能となり、かつ確実に客観的に行われるに至りました。また文字は、経験や知識内容を書き残すことによって学問をつくり、その普及と進歩の端緒を開きます。「始めにことばありき」という実は、この文字によって益々かたまって行きます。

これ等の著しい変化を生ぜしめた要因は、農耕文明の成長にあります。狩猟や遊牧の生活下では困難な食糧の備蓄が可能になったことによって、

生活と時間にゆとりができ、民族の結成がたかまり、民族と民族間の交通、交易が進み、これ等は再び農耕を刺激して、農耕は遂に人類の決定的な産業になったのです。ここに農耕に便な四大河のほとりに、農耕技術に支えられた古代高度文化が開花します。そして農耕経営の要点は治水灌漑です。これには大きい労働力を要します。ここに治水灌漑、労働力等についての行政、それにつづく祭り等を司令する者が出てこなければなりません。かくしてエジプトには神王が、メソポタミアには司祭王が、中国には三皇五帝というような徳望や權威をになう首長をいただく古代都市国家の出現を見るのであります。

(四)

さて、この古代高度文化の時代の最も注意を要するものは神話であります。祈り、叫び、叙情詩等として発生したと思えることが、一つの信仰ないし思想をあらわすものに発展したことは、それだけで知性の進歩とその結実としての知識の発展を意味します。事実、紀元前三五〇〇年頃にはエジプトに十進法の数体系が用いられ、また紀元前一七〇〇年頃には幾何学の基礎が出来上がったと言われます。しかし、ここで更に重視しなければならぬのは、神話が神々という最初の人格的像をつくったことと、思弁的知性への発展を開いたことであります。

神話は、前史における人類の真実な畏敬の表現です。知性を付与された生物が最初にかつ等しく求めてきたものは、その存在の依って来たった根源と、また、彼等のアイデンティティの拠り所でありました。彼等は、この二つの根源的願いをかける対象を彼等なりに厳粛に感受し、その感受したものを神々として表現し、これに帰依し、また、未来に向かって生きて行

くための支えをもここに求めたのです。このような複雑な生活感情を総合的に体系的に表現しているのが神話であります。ここに思弁的知性が機能し出した跡がうかがえます。また、彼等のつくった神々の像は、彼等の理想とし、求めたいと願うものの客観的投影であり、また、その人格的表現でもあります。これを言いかえれば、前史時代の人類は、自然や獲物との出会いではなく、人格的なものに近似した神々との出会いを初めて経験したのです。マルセルやブーバーの論理を借りるならば(4の八十五頁)彼等が真実に畏敬の念をもって「神々よ」と呼びかけることを始めた時に、実は、彼等の中に尊い人間的なものが目覚めつつあったのであります。

前史時代における無意識的知性の機能した時代は、「眼の思考」(Denken des Auges)と「手の思考」(Denken der Hand) (2の三十頁)を行いつつ行われる小家族集団の孤立時代から始まり、社会化の要具と知恵である「ことばと計画」の成長する第二時代を経て、第三の時代として古代高度文化の開花期を迎えるが、この時代の唯一の精神的表現である神話に登場する神々は、次第に人格的な性格に発展し、この神々との出会いによって、未解人の内面に次第に人倫的なものを目醒めさせていくのであります。

二、前意識的知性の機能時代——一神及び汎神との出会い

(一)

人類は、西紀前六世紀をはさんだ約千年間に歴史の壮麗な夜明けを迎えます。ギリシャ、インド、中国の三か所に同時に、単なる農耕文化を揚棄する新しい精神的内容を盛った文化が一斉に開花し、また、イスラエルの民という特別な民族の歴史が大きく廻転を始めるのです。

古代高度文化の時代においては、民族意識も個人意識も未だ表に現われず、専ら神王や司祭王の統べる秩序の中に没入していたのが、この時に至って一斉に自覚を呼び醒ますとともに、特に優れた精神界の天才達が生まれてきます。前六世紀に例をとればブツダ（前五五頃～四八五頃）、孔子（前五五二～四七九）、ターレス（前六世紀前半）、エレミア（前六世紀頭初）等の思弁的知性が触発してきます。そして古代高度文化の中で積まれた経験や断片的に発達してきた知識は、何かにつけて再生され、新たに目醒めた思弁的知性とともに、新しい歴史の進路を開く方向に機能し出します。ここに再生知性は思弁的知性を刺激し、思弁的知性はさらに過去の経験と知識を再生させて、ここに「理性」（Vernunft）と呼ぶ一層深めた知性が発展し、この理性は、さらに理念的理性と実践的理性の二面に向って機能を起します。私の言う「前意識的知性の機能」とは、それぞれの人生の局面において、再生知性との相関関係の中で育つところの思弁的知性（理性）のはたらきを指すのであります。

まず思弁的知性の半面をつくる実践的理性を中軸とした発展は、主としてユダヤと中国に起こり、ユダヤでは、深く現存在を反省するとともにメシア（Messiah）の出現を待望する予言者達が生まれ、中国においては内なる仁愛をもって社会の結合をはかり、外には礼をもって現実の秩序を維持することを教える孔子とその弟子達が現われます。次に、理念的理性を中核とした動きは主としてギリシャとインドで発生し、ギリシャでは、自然のロゴスの探究に手をつけたターレスに始まり、続いて人間のロゴスの究明に進んだソクラテスとさらに社会のロゴスの発見に努力した多数の哲学者達が出るに及んで、理念的に発生した理性は、次第に実践的の面にも発

展してきます。インドでは、人間の本性を徹底的に問うたブツダが生まれ、われわれを、いかり・よく・ぐち・こじつけ等の四つの迷いから出たり入ったりしている者、また、この出たり入ったりを複合的な関係の中で繰り返している人びと「マニューシャ」（manuṣya）として扱いました。このマニューシャは鳩摩羅什によつて「人間」と訳され、仏教の日本渡来とともに日本に入り、千四百年の歴史の経過の中で今日の意味のものになりました。かくして man, Mann, Mensch, anthropos, humanus, homo 等の単なる符号にすぎないことばとは違ったもの、すなわち、そのものの本性をあらわすところの意味を持った「人間」という日本語独得のことばができたのです。和辻哲郎はこのことばの持つ人倫的意義に特に注意を向けましたが、たとえ倫理学者でなくても、日本人がこの無意識に使っている「人間」というこのことばを意識に呼び返えし、その本義を考えるならば、この前六世紀のブツダの思想に帰らざるを得ないでしょう。

この前意識的知性の機能時代では、まず「人間」の自覚が起こってくるが、併せて民族的意識も覚醒します。ユダヤ人は「イスラエル」（神の闘士）ないし神の選民として、ギリシャ人はポリスの市民「ポリテース」として、ローマ人は「ローマ市民」として、中国人は「中華人」として、（また大和民族においても「ことだまのさきおう国の民」などの自覚があった）等々の自意識の覚醒であります。この時代を一貫する決定的特徴は、それぞれの民族意識によつて多少の相異はあるとしても、人間存在の拠り所となる原理と、その原理にもとづく人間形成の道が第一義的に求められたところにあります。これを一言でいうならば人倫の覚醒時代の到来でありました。

(二)

枢軸時代の人倫の「目醒め」においては、まず第一に人間存在の共通の原理が求められ、第二にその原理とするものと人間との間の結びつきの関係が、そして第三に人間同士の横の關係が考えられてきます。まず第一の「共通の原理」について見るのに、西洋においてはユダヤ教に発した唯一絶対・全知全能の人格的の一神が立てられ、インドにおいては理念的な「梵」(Brahman)が、中国においては自然法的な「天」が考えられました。第二はこのような三者のそれぞれと人との結びつきであるが、西洋の狩猟の民の後裔は神人の間をおきてにもとずく「契約」と考え、インドの森の瞑想の民は「梵我一如」と推論し、中国の広大な土地で農耕の長い伝統を持った民は「天に順う者は存し、天に逆う者は亡ぶ」(孟子離婁)という極めて現実的な了解の下に天人が結ばれたと言ってよいでしょう。そして第三の人びとの横の結びつきは、西洋においては「一神の万人に對する平等の愛、万人が一神に捧げる共通の愛によって、当然万人は隣人の愛で結ばれる」という「アガペー」(agape)ないしは「カリタス」(caritas)によって結ばれ、インドにおいては、正しい最高の友情をつくす「慈」(maitreja)と苦しむ者の苦を取り除いてやろうとする愛の「悲」(karuna)との心、すなわち「慈悲」をもって万人を結ぶ共通の帶とし、中国では「礼」を保ちつつ、親愛という骨肉の情を社會關係一般に及ぼす「仁」をつくすことが人びとの交わりの基準にされました。

さて、このような前六世紀に始まる精神的諸傾向においては、それぞれの特異点と共通点とが現われてきます。まず民族を支える共通の原理について見るのに、西洋においては唯一絶対の人格神として比喩的に具体的に

把えられ、またこの神と人とは別格として考えられたのに対し、東洋では理念的にかつ同格として把握されます。すなわち、われわれの支えとなる原理は大宇宙の根本的創造力としての「梵」であって、われわれ人間はその下にある小宇宙をなし、この小宇宙であるわれわれのものにも汚染しない清純な「我」(atman)を取りもどした時に、「梵と我とは一体となるというさとり」が開かれるのであるが、このさとりを開くことによって神的大宇宙と人的な小宇宙とは別格ではなく、同格のものとして統一されるのです。ここにこのような東西二つの基本的人生態度が生れるのであるが、その代表の一つは、神のたれる絶対的愛の約束を信じて敬虔に現世を暮し、これによって願わしい現存在を実現しようとする「キリスト者」の態度であり、他の代表の一つは、各自の内面に潜在する本来の資質を掘り出し、開發し、鍛練して、もってより高い次元を達成し、言いかえれば、現状をそのままとしては否定するが、さとりに至った更に高い次元でこれを再び肯定して、人間完成をはかろうとする態度、すなわち「覚者」の態度です。それに対して儒者のとる「君子の態度」はキリスト者よりもはるかに「覚者」に近いが、現実的次元をそのままに肯定し、そこに人倫關係を再編成しようとしている点が仏教者とちがうところです。勿論仏教者においても「色即是空」、「娑婆即寂光」というように現実界と理想界の不離を説きますが、仏教ではこの二つの世界の間に人間の心的革命の起こるのを条件とするところが違っているのです。ここがブツダの教えの独得な所で、現実的な知識に縛られた者には理解が困難となります。いずれにしろ、一般的に「キリスト者」、高遠な「覚者」、教養的な「君子」がこの時代の人びとの仰ぐ理想的人間像として考えられたことは、正に特筆すべきこと

であります。歴史家は、現代における原子力の解放を一大事として考えるのと同様に、過去のこのような歴史事象をも重視すべきであります。

(二)

さて、知性が全面的に意識の表面に登らず、その時点での知性能力を越えた不可知ないし神秘を多分に感じていた古代の人間性は、後代におけるそれよりも一般に純粹で、敬虔で、かつ全人的であったことは疑えません。そして現存在の支えを一神ないし汎神(天をも含めて)に求めたのです。一神は万人に共通の目標を与え、汎神は万人に共通の考え方を呼び起こしたと言えます。ある者は一神との出会いを持ち、またある者は汎神を内心に感じ得たことは、反転してその者のそれぞれに真実の人間を呼び起こしてきます。再びブーバーとマルセルの「我・汝」関係(4の七十九頁)を思い出すのであります。

ところでこの汎神論は、主としてインドに、またギリシャや現代哲学等の各所各時代にあらわれたり、あらわれつつあるのに対し、一神への信仰は全ヨーロッパに及んで普遍的に一樣にあらわれ、しかも、この精神的の世界は中世約千年間にわたって制度化されるに至りました。すなわちキリスト教とその教会制度であります。

キリスト教における人倫は、全知全能かつ審判の神であるヤーウエ(Yahweh)という民族神とその選民であるイスラエル民族に属する人びとの間の人格的関係の発生に根源を持つのであるが、それが新約書においては一つの進展を見せて、神は無限の絶対的な愛をたれる人類的愛の神に変わり、この神は、悔い改めた者を総てキリスト教徒として選び、これと約束を結び、祝福を与えた上、さらにこのキリスト教徒に向って、唯一の

神と多くの隣人とに対して正しい態度を保たねばならないという誠めを与えるものになっています。この神への信仰は、ローマの不安定な政情下において忽ち全ヨーロッパに伝わり、遂にキリスト教によるヨーロッパ世界の信仰的統一が実現するに至ります。ここにまた「キリスト者」という倫理的な人間像が確立し、ヨーロッパ一般の風をつくったのですが、こういう信仰を広め、その信仰社会を保持強化するために教会制度が発達し、この千年に及ぶ制度化の中でヨーロッパ社会はシュペングラーの言う硬直現象を起こし、遂に、創造性を喪失してしまっています。ここにもまた歴史における制度化の矛盾が、かつてのポリスの矛盾、大ローマの矛盾につづいて起るわけであります。

他方汎神論的發展は、インドのヴェーダやバラモン教、古代ギリシャの世界観等に起こり、特にギリシャではプラトンのイデアの説に、また、現代頭初ではヘーゲルの哲学体系を貫くものとして、時と場所を越えて発生し、發展してきたが、中でもブツダの説いた体系は単なる思弁ではなく、自然と人間の本性を深く洞察した上に立つての教えであって、現代において再生しなければならない内容を持っています。いずれにしても、汎神的信仰は、深い英知の、すなわち、現実的・実証的知性を越えた真知を必要としている、少くとも或る教養の水準を達成しなければ了得のできない性質を持っています。倫理学的立場から見れば、キリスト者の信仰は近くに「幸福」を予定する「幸福説」につながるが、汎神への信仰は、まず自己の内面を省察した上、そこに全宇宙的なものないしは普遍的神性と相通じる何かを発見し、これを開発し、發展させ、鍛練して、然る後に自己の完成をはかるということで、「完全説」に属します。完全説による実践はキ

リスト者の修行に比べてはるかに困難で、挫折しやすいのであります。従ってキリスト者の信仰のように一般的普及は困難であり、事実において仏教の教えは、文化の発展したある時期あるいは教養のあるサークル等において普及したもので、丸山真男の用語を拡大解釈して使えば「タコ壺的」であり、一方キリスト教信仰は、末端は様々のようでも時のつながりと場所とにおいて共通の根拠を持つ「ササラの」であると言えます。

前意識的知性はいわゆる理性として発展し、仏教、キリスト教、哲学及び倫理学説等を生み、「キリスト者」、「君子」、「覚者」等の理想的人間像を育てたが、東洋の高遠な教えはタコツボ的で一般性がなく、一般性に乗って制度化したキリスト教会は、文化の運命として「硬直」(Starrheit) (1の一卷四二～三頁)を起こして創造性を失い、かくして中世は終るのであるが、特筆すべきものは人倫の自覚と個人の人間形成の実践が行われたことでもあります。

三、意識的知性の活動時代——近代科学技術との出会い

(一)

世界史の中世と呼ばれる時代で最も際立ったものはキリスト教によって統一されたヨーロッパ世界の成立であり、ここに世界の中心が形成されたことです。この中で中世千年を専らキリスト者として生きてきたヨーロッパの人びとの中にも、次第に新しいエネルギーが蓄積されるとともに、東方世界との接解が盛んになるにつれて、彼等の物の考え方に変化が起こってきます。すなわち、ギリシャの古代科学と人間的な芸術とがイタリアにおいて再生するのと相まって、近代ヨーロッパ人一般の中から自然に向

けられた意識的知性の活動が始まり、人びとの万象を見る目を変革し、そこから近代以後をリードする科学が成長してきます。ヤスパースの文章を(3の一一一頁)借りるならば、これまでの人間は、地球について、漠然と推測はしていても、実感として球形と感じていた者はほとんどなかったのであるが、正にこの時に最初の地球儀がつくられました。経験が遠大な世界へと及んだのと同じように、身近かな物にも及んできました。ヴァサリウス(Vasalius, Andreas. 1510～46)は、前人には未だかつてなかったような研究者の情熱を傾けて屍体解剖を行って人体解剖学を創始し、レーウエンフック(Leeuwenhoek, Anton. 1632～1723)は顕微鏡を用いて水滴中に群れ動く微生物を見つけました。ガリレイ(Galilei, Galileo. 1564～1642)は望遠鏡を使って、まだ誰にも見るできなかった遊星や衛星の様子を見たのです。シュペングラーが指摘しているように、人類の鋭いかつ精緻な眼は(2の三〇～一頁)、近代科学の生んだ光学機械の力を借りて更に性能を増し、微小の世界とともに遠大な領域をも究め出しました。これは直立歩行の発生につぐ人類の一大変化であるが、しかしそれはかつてのような突然変異ではなくて、実に近代人のはっきりした意識にのぼった知性活動のもたらした所産なのであります。そして、このような観察によって得た結果を単なる感じとして残すのではなく、正確な数値で確認する方法までが發明されるに及んで、形のない熱も光も目に見えない音も、その他一切の理化学的現象が数値と符号によって客観的につかめるようになったのです。この革命的な發明をしたのがベーコン(Bacon, Francis. 1561～1626)であり、これを機縁にして科学の申し子である近代技術が發展し、この科学と技術によって、現代人の怪物的發展が始まります。この怪物は、頭脳、

五官、四肢、五体のすべてにわたって、その能力を何百倍に、また物によつては何千倍にも増副する近代科学・技術と名づける特別装置を取り付けて、異状な活動を始めます。コムピユーターを使つて瞬間に複雑な計算をやつてのけ、居ながら地球はおろか月や火星の情報を知りたりし、各種の作業機を發明して手に何千倍かの仕事を行わせ、また、時速何百キロで走ったり、大重量物を運んだりするすばらしい足をつくりました。その上に、物凄い羽根をもつて宇宙を飛び廻る超怪物に成り上がったわけです。この怪物の異状發育は尚続きそうであるが、これは人間の眞実の成長と發達のために果たしてどれほどの役に立つであらうかと考えると、疑問と言わざるを得ません。またこれだけの頭腦、五官、四肢、五体に相當するものの躍進的進歩に比較して、それに相應する英知、情操、靈性等における進歩がこの怪物に見られたかという点、残念ながら見られなかったと言わねばならないばかりか、逆にこういうものを嘲笑し、否定する風潮すらも出ています。思ひ上がった現代人には神祕は消え、神聖は無視されるに至つたのを見て、「神は死んだ」というニーチェのことばが深刻に思ひ出されてきます。そして、現代人が「汝」として呼びかけ得る神を失つたことは、「我」として自覺する人間を失つたことに外ならないのです。人間はかつては自らつくつた神や汎神との出会いで自らの人間性を發見したのとは反対に、今や自らがつくつた機械にあやつられ、また、機械を發明するために自らつくつた知識体系に捲き込まれて、自らを齒車化しつつあります。それにもかかわらず、現代の知識人は、思へば何んでもできるといふ不遜な信仰にかられています。そして、こう思うことが、ただに權力意志の拡張や、感能的な享樂にのみ向けられ、精神の深さには及ぼうとし

ないとすれば、それは人類の禍でなくて何んでありましょう。われわれは、現代の科学技術をこの次元では否定し、他のより高い次元において再び肯定しなおさねばならない時期に立ち至つていゝと思つております。

(二)

近代頭初に目醒めた人間の意識的知性、言いかえれば近代の科学的なものの知識欲は、その發展の過程において、それ自体一つの危険と悲劇をつくり出していました。これを象徴的に物語っているのが「ドクトル・ヨーン・ファウストの物語」という近代ドイツの民間物語 (Volkbuch) であります。

伝説のドクトル・ヨーン・ファウストは万物の原理をきわめ、全知全能の力を得たいという願ひを起こして、大学の全学部を卒業したのだが、知り得たものはただ「何ものをも知り得ないということだけを知り得た」だけでした。そこで悪魔メフィストの力を借りて全知全能を得ようとして、深夜の森の中で彼と契約を結びます。かくして二十四年間思うがままに欲望を充たしてきたが、悪魔との契約の切れた二十四年目の深夜において、遂に悪魔によつて魂を奪ひ去られ、跡には僅かに血痕と肉片を残すのみであつたというのが、この物語の荒筋です。これは正に近代科学發達の初期において起つた困難と危険、またそれにもめげず近代人の異常な知識欲の高まりがあつたことの証明でもあるとともに、キリスト教的立場から出た新時代への疑問と抵抗、言いかえれば、科学・技術の本質への無意識的批判の象徴であつたと言えます。この物語は、この二つの意味でヨーロッパ人の関心をさらし、マロー (Marlowe, Christopher, 1564-93) によつていち早く戯曲化され、當時の旅役者達によつて全歐の宮廷

や貴族の前で上演され、ここから更に市民文学の開拓者であるレッシング (Lessing, Gotthold Ephraim, 1729～81) の目に触れて、その近代性が認められるに至ります。第二ルネサンスの万能の天才ゲーテ (Goethe, Johann Wolfgang von, 1749～1832) が更にこれを取り上げて不朽の名作に書き上げたのだが、彼はこの作の第二部において、近代科学と技術は決して悪魔の世界に属するものではないが、しかしこのような「事業」にたずさわる者には困難な、悲劇的な開拓者の運命が待ち受けている、しかし「努力してやまない者」には最後の救いがあることを象徴的に示しています。一八三二年にゲーテが死に、その直後にこの「ファウスト」第二部は出版されますが、現代を告げる哲学者ヘーゲルの死はその前年です。正にこの時代は現代のあけぼのでした。科学・技術は現代文明の中央の座について、世界史に君臨することになります。しかし、そうだからと言って、科学技術万能の下における状況が予見されたわけでもなく、また、新たに問題が起らなかったわけでもありません。ファウ・フィッシャー (Vischer, Friedrich Theodor, 1807～1887) は「ファウスト第三部」を書いて、なおこの近代的問題を追究し、別にまた神学と自然科学との間の論争はつづきます。

さて、現代の科学技術によって起された一般状況を見てみると、その方法上の体系が益々大規模化するとともに強固なものになり、「巨大科学」、「巨大技術」、「巨大産業」と呼ばれるものを生み、加速度的な進歩が続けていきます。ところが早くもマルクスが言うような、除外され、取り残され、搾取されるところの「疎外人間」や、ハイデッカーが指摘するような、組織化社会の中で本来の自己を失った「ダス・マン」(Das Man) や、ヤ

スパスが取り上げるような、非合理的暗示にわけもなく躍らされる「大衆化した人間」や、トフラー (Toffler, Alvin) が最近に問題にした「未来衝撃」におののく人間や、エリクソン (Erikson, Erik Homburger, 1902～) があげるところの「アイデンティティの危機」に悩みつつ自己の向う所に迷う人間や、ドラッカー (Drucker, Peter F.) が言うような、あらゆる分野における非連続性すなわち断絶の現象等々が次から次へと問題になりつつあります。また、それとは反対に「未来学」、「知識産業」、「情報産業」等々の極めて楽天的な未来行バスも走りだし、これに乗り遅れまいとひしめく者も次から次へと押しかけてくるが、このような楽天組からは益々多くの人間喪失者がでてくるのを憂えざるを得ません。たとえこの楽天家のとおりに未来が開かれるとしても、現代文明の足許から起こりつつある環境崩壊の中では、既に一部の生物が死滅しつつあり、やがては、人間の生存を根本的に脅かすものにもなり、三十六億乗組の宇宙船の運命が憂慮され出しています。われわれは、これ等の直接原因である科学・技術の本性を見きわめねばなりません。

(三)

今日の科学・技術の本性を見きわめることは現代の大仕事であり、到底一人や数人の知恵のよくするところではないかも知れないが、しかし目前の歩むべき道はたとえ曲折していても、進むべき明るい方向は常に見えてはいるはずです。その進むべき明るい方向とは、人類が共に現実を超越して、より高い次元に向って進み、そこで真実の人間生活をきざくことだと信じます。ところが現実は今申したように逆になっています。この逆現象の発生は、科学・技術によって「ゆたかな社会」がつかれるという信仰と

矛盾します。この現実の矛盾は速にわれわれの手によって是正されねばならない。この是正をヤスパースは「諸精神の永遠の王国」(Das ewige Reich der Geister) (3の四十七頁)の建設にしています。こういう抽象的な示し方で果たして新しい人類の目標となり得るかはなお疑わざるを得ないとしても、彼のこの目標設定の前提となった現代科学・技術文明の批判については、私は大いに敬意を表する者であります。彼の言うところの中心点を引用すれば

「各科学は方法と対象の枠外には出られない。それぞれは世界への一展望であるが、どれも世界を捕えない。それぞれは現実の一断面を当てているが、現実ではなく、おそらく現実の一面にすぎず、全体としての現実に当たってはいない。もろもろの特殊科学が存在していても、現実の学としての一個の特殊科学はなお存在しない。そうであるから、総ての科学は特殊的で、専門的で、そして分科的であるが、しかも、境界がなく、さらにまた、関連連している一つの世界に属するものである」と。(3の一一四頁)

ヤスパースがここで言うところの「それぞれの分科科学が、境界がなく、さらにまた、関連連している一つの世界に属する」とするならば、一体それは具体的にはどのような世界なのだろうか。総ての分科科学を統合し、関連連させて、これを全人的な学にするようなことが、どうしたら可能になるのだろうか。この点が解決されない限り、われわれは科学の断片性、特殊性、没価値性、時空にわたる限界性、組織性から逃れ出ることは出来ないと思うのです。この諸点が揚棄されなければ、一回性の生命に根をおく全人的な人間存在は回復し得ないと思うのであります。

正に科学は、その方法と対象の枠外には出られないし、またどのように

大規模に体系化しようとも、それは自由な人間活動の極めて局部と関連するにすぎません。また、科学が如何に明晰な意識の上に立とうとも、その意識は、大きな無意識と前意識とに比べるならば狭少な一露頭にすぎないのと同様に、意識的知性は生命の極めて小さい部分にきり触れ得ないものであります。しかも、この意識的知性によって組み立てられる科学的方法的知識体系は、何かを分析するための方法的知であって、生命の目的知となることは不可能です。たとえて言えば家の中の戸棚を開け広げたり、抽出を引き出したりして中味を吟味し、場合によっては台所や便所の隅々までも見てまわるような知であって、整理整頓し、統合調節し、家政全体を進めるような総合知ではありません。そういう総合的知には別の次元の知が任用でありましょう。従って科学には限界があるのとともに、戸棚の中はやたらに公開するものではなくまた開けたままにしておくものでもないのと同様に、科学には一つの制限が設けられねばなりません。すなわち、科学が何んの制限もなしに技術に応用されるならば、それは危険を招き、また科学が万能であるかのように過信されれば、それは精神の開拓を忘れ、人間形成を歪曲させる結果を生むでしょう。科学の限界性が忘れられ、また、科学行政によって科学の応用に制限がかけられない現代においては、現代技術は大きな矛盾を起こし、ひいては倫理の頹廃をも引起こすことであらう。これが正に現代であります。

結び 現代科学と技術を揚棄するもの、

真の人倫の原点を求めて

人類の発生要因は「直立歩行」に因って「眼の理念的思考」と「手の実践的思考」が始まったことにあるというシュペングラーの卓抜な見解をここにもう一度思い出したいと思います。これを言いかえれば、「知性」の発生に外なりません。そして、この知性こそが人類を、動物から分離し、人類たらしめてきたものでありました。ところが、その知性が人間の意識に取り上げられて、意識的に行使され出した今日においては、反って人間性を奪い、人倫を喪失させつつあるばかりでなく、人間の生存をも危くさせるものになりつつあることは既に指摘してきたところです。これは歴史の大きな矛盾です。この矛盾は人間の手によって解決されねばなりません。人間の最高の知性を注ぎ込んで……。この矛盾を生み出しつつある現代の科学と技術はこの次元においては否定せざるを得ず、何かより高い次元において再肯定をする道を発見しなければならなくなりました。

(二)

人間性を無視した科学の独走態勢や、その応用については全く放任されていること、ならびに、実生活に有害な技術の開発が無反省に公然と行われている世界の現況については、新たに国際規約をつくり、世界を挙げて嚴重に取締ることをわれわれは提唱しなければなりません。生命の神秘とか人間の恥部とかを説明するような研究は、純粹の学問としては許されても、その発表の方法や応用については制限があるのが当然であります。なぜなら、素人に放射能をいじることが許されないのと同じであります。また科学の応用によって兇悪な殺人兵器をつくるが如きは、人類の永遠の仇敵として世界史に永遠に記録するのは勿論、原爆・毒ガス・細菌兵器を禁止するのは言うまでもなく、一切の兵器製造の技術を国際法をもって規制

する時代が来なければなりません。

さて、このような、科学と技術に対する国際的の行政がたとえ実現しようとも、それは当面の危機打開の一方策に過ぎないものであって、これだけでは現代の知性活動の矛盾を揚棄することはできません。それには現実的知性以上の英知が必要です。そのような英知をどこに求めたらよいか。

私は、この現実的知性を揚棄するものを「知見」と名づけ、これを仏陀の知恵の中から再生させたいと思います。何故なら、仏陀の教えは、私のいう人間形成の二つのパターンのうちの一つであって、それは汎神的なるものの自覚にもとずいて自己の人間革命をはかり、これを経ることによって、そこから再び本能と現実的知性を肯定し直す立場であるものの最高の代表であるからであります。この第二のパターンは第一パターンよりも理解と実践の面で困難をとめない、それ故に今まで忘れられてきたものであります。現代こそブツダの英知が再生されるべき時であると信ずるのです。私がここで言う知見の出所は、法華經方便品中の「諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なることを得せしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生に仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。」（法華經大講座、三卷、一四九頁）に出てくる「仏知見」にあります。原語は *tathāgatajñānadarsana* で「仏知を方便として見せること」を意味し、従ってケルンの英訳も *the sight of Tathāgata-Knowledge* となっているという説もあるのですが、若しそうだとすると、この「開・示・悟・入」

との意味の連絡がつきません。そこで私は久保田正文教授増補の「法華經大講座」第十二卷、一三〇頁の註、知見とは「物の真実の性質を見極めて行くこと」の解釈をとることにしました。

では知見とは何かと言え、現実的な表面的な一般的知性は $1+1=2$ ときり見ないが、知見は $1+1=I$ とも $1+1=10$ と見るような、質的変化をも含めて洞察する英知であります。たとえば一人の男と一人の女によってできた夫婦は、現実的知性から見れば単なる二人の人間の集合であるが、実際はそれに止るのではなくて、「夫婦」という一つの新しい単位を編成し、そこにおいての一人の男と女とは、はっきりとした「汝」と呼ぶ対象を得て、これによってまた深く「我」と感ずる夫となり、また妻となつて、それぞれ質的成長を遂げるものであります。夫婦は単に二人が寄り合つたという数学的ないし物理的關係以外のものであり、これを見抜く英知が一つの知見であります。

では人間の知見の向うべき中心は何か。それは平和であります。なぜなら、鋭い犬歯を失い、鉤状の爪をもその身体から捨てた人間は本来平和な生物であるべきで、闘争を揚棄したはずの者であるからであります。そうであるのに、道具を持つことを覚えた「手」は、不心得にもその道具を武器として使用するの誤ちを犯すことがあります、そういう誤ちを起こさせない英知がまた一つの知見であります。ここで一言つけ加えておくことは、私の知性論においてシュペングラの両著から多くを引用しましたが、この点においては彼と私とは全く反対の立場にあることです。彼は、「人間の眼がよく距離を測定することができ、かつ、手に武器を持ち得ることによって、人間の本性は攻撃闘争にあると言える、民主主義だとか最大多

数の最大幸福などということとは人類の敗戦主義に通ずるものであつて、真実をいつわるものである、よろしく闘う決意を持つことによって西洋の没落は避けられる」と結論していますが、これは私の結論とは正に反対です（1の全巻の趣旨）。彼はこういう点ではナチスに近く見えるが、しかし彼はナチスには反対でした。が、これはやはりドイツの悲劇であつたことには違いありません。私は仏教の、きびしく正しいものを授ける「慈」と、やさしく苦を取り除いてやる悲とをもつて人生最高の生き方であると思つて、英知を導び、この英知をとるのを最高の知見であるとする見解を堅持するものであります。

(三)

仏教思想は、本能・知性・知見の三つについての弁証法的關係を巧みに現わし、その究極において真実の人倫關係を示しているという私の見解をここに述べて、この講演を終わりたいと思いますが、その立論の根拠は天台が十法界として体系化した思想であります。

人間の知性の立場から、生物の基本的本能である攻撃欲・食欲・性欲にとどまる者を見たとき、また知性がつくり出した唯一の結実である人倫を喪失した者を見る時、そこに地獄界・餓鬼界・畜生界としての評価が人間及び人間以上の者によって下されます。人間の知性は、このような三つの単なる本能世界に停滯する者、すなわち「三惡道」をそのままとしては否定し、一層高い心性に立つてこれを再び肯定しなおして、闘争を競争に、食欲を食事に、性欲を夫婦生活にという文化關係に、すなわち、「三善道」に高めるはずのものであります。しかし、若者の初期の知性の目醒めは、矛盾撞着を起し、理論的争いを追うものですが、このような眼前の理と

知に拠って論争する世界は修羅界（阿修羅）と呼ばれます。興福寺の国宝阿修羅立像が多感な少年として表現されているのは、まことによくこれを表現していると思います。ところでこの境地をはるかに克服して、現実的な世界のそれぞれの対象に対してそれぞれの方法知を立て、これに拠ってそれぞれに学問的解決をつけるが、しかしそれは、その人、その所属する集団の一応の解決にすぎない——だが、それにもかかわらず、そういう解決をえがいたことで何か真実に触れたように錯覚している者達の世界もできてきます。これは天上界と名づけられ、「三界の二十八天」というような様々な空虚な理想の世界が考えられてきました。すなわち天上界とは、欲界・色界・無色界という、いわゆる「三界」の中で、①現世的（欲界）な六つの理想境、②道徳的（色界）な十八の理想世界、③世俗的（無色界）から考えられる四つの世界という合計二十八の様々な理想界が考えられるのです。これを一言で言えば、「知見」による人間革命を経ないで、一般の現実的知識に立てこもっている俗人や学者や識者というような人びとの立てる諸々の学説・意見・外一般の生活態度を指すのであって、これを一言で言えば、今日の一般の教養人や科学者の世界に当たります。そしてまた、このような天上界的境地にもなお到達できないが、しかしまた、単なる理知的論議をもて遊ぶ修羅界にも止まることができないで、この中間で迷いを続けている一群の存在があります。このように、知性的段階の中間で迷いを続けている存在が人間界であります。すなわち、本能的世界を揚棄した修羅界・人間界・天上界という三善道の世界でもなお修羅の争い、人間の迷い、天上の独善等の解決をつけねばなりません。ここに第二の揚棄が知見によって行われます。

知見の世界への導入は、まず知見が「開かれる」こと、すなわち現実的意識的知性以上の英知の存在に気付く心的転廻であります。この心的変革を経た上で、仏の説法や真実の理法のささやきによって「示される」知見の声に謙虚に耳を傾けて聞き、学習につとめる段階が出てきます。これが声聞界です。声聞界での修行の後、自ら機縁を求め、自ら「悟（覚）り」を開こうとする自力による努力の段階に発展することによって声聞界が揚棄されます。これが縁覚界であります。かくして他からの指導と自らの修業とによって、人と人との間において生きる原理を「慈悲」としてとらえ、この知見にもとづいて一段高い実践理性の命ずる道に「入」って、再び縁覚界が揚棄されたのが、すなわち否定の否定に立つのが菩薩界であります。そして、この地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上・声聞・縁覚・菩薩の九界を一身に具えながら、しかもこの総てを揚棄して、人間の最上位に達し、しかも不動の境地に至ったのが仏であります。すなわち仏とは、すべての否定の否定に立つて、すべてを正しく大肯定して成り立つところのものであります。

この釈尊の教え、および天台・聖徳・伝教・日蓮と続く法華経精神の中心にある十法界の人間観は、現代の世界危機の打開について、極めて大きい示唆を与えていると信ずるのであります。真実の人間は、人間性の中に秘められた人倫の複合弁証法的発展の能力を自覚し、この開発を自覚する上に成り立ち、正しい未来の歴史はこれによってきずかれると信じます。

小説「海軍」に就いて

近 藤 久 美 子

昭和十六年十二月八日は日本帝国^Aが米英中蘭^{B C D}の聯合軍に向つて、宣戦布告をした日であり、九軍神―實際は十人の海軍軍人―が真珠湾を奇襲攻撃した日であるが、この九軍神の戦死の報は翌年、昭和十七年三月七日に発表され、岩田豊雄氏の小説「海軍」は私の記憶に誤りがなければ、翌十七年の七月一日から朝日新聞に掲載されたのだと思う。当時、私はその小説の分を新聞から切りとり、スクラップブックに貼りつけては、毎日少しずつ翻訳しつづけた。別に動機というものはない。私は始めからこの小説の翻訳を公にするつもりは全然なかった。唯、当時私は九軍神の死に方に異常なショックと感激を受けていた。戦死発表の後、小説が新聞紙上に現われるとそれを、ある感慨を以て読んだ。そしてそれを、仕事の合い間に英語に変えて行つたまでである。当時、英語は敵国の言葉であり、英語教師は徐々に教壇で英語を教えられなくなつていった。学校を出て間もない私は、英語教師として、マな時間ができた。一方、戦時体制下では、学校で英語を教える事を禁止した事を秘かに残念に思つてもいた。兎に角、一応英語を専門にしてきた私は英語を捨てる気持はなかった。英語を忘れない為

もと思つて、日本語から英語に変えて行く作業を、ヒマにあかせて、毎日やつていた。今、思いかえすと、よくまあ、やつてのけたと自分ながら感心する。年とつた今では、とてもやつてのける気にはならない。今日読みかえしてみても、まことに盲、蛇におじずの類^{たぐひ}であり、現在、手許に残つてゐる原稿を読みかえすとジクジたるものがあるし、当時の英字新聞は、私の訳をかなり、新聞むきに省略して載せてある事が明らかであり、印刷上のミスもあつて、私の意に添つたものではない。最終的に、もつとも丹念に修正に修正を加えて仕上げたものは、残念ながら、―某出版社に単行本にする要望があつて、渡してあつたが―昭和二十年三月の大空襲で焼失してしまつた。遂に単行本となる陽の目をみない中に、日本は敗戦の道を辿り、「海軍」も世をはばかつて、私の書庫に埋れたまま二十幾星霜を経た。今回、岩本学長の御好意あるおすすめに依り、論叢にそのほんの一部を載せさせて頂く事になった。埃だらけになつた原稿をとり出してみると感無量である。

小説「海軍」の著者岩田豊雄氏は昭和四十四年十一月三日文筆の功労を以って文化勲章を受賞された。その後間もなく七十有年の高令で他界された。氏は獅子文六の名で、より有名であり、多くのユーモアに富んだ名著を残された。「自由学校」、「てんやわんや」、「信子とおばあさん」、「娘と私」など多くの傑作を書かれたが、そのいずれも、獅子文六なるペンネームを用いられた。文六氏は然し、「海軍」を書くに当っては、襟を正し、げんしゆくな思いからペンネーム獅子文六を排して、特に実名、岩田豊雄で、この小説を書かれた。何かの折に「ペンネーム獅子文六では主人公に申しわけないと思ったからである」と言っておられたのを記憶している。それ程に襟を正して書かれたのだと思う。従来、又それ以後の文六氏の小説とは大部おもむきを異にしている。文学的価値云々は別として、今は一つの歴史ともいえる戦争のひとコマを小説化した事にある意義があるうと考える。

今は他界された岩田豊雄とは、氏がまだ千駄ヶ谷のお宅におられる頃に一度お目にかかった。「娘と私」の中の娘の育ての母に当る静子夫人にもその時、お目にかかった。

翻訳が、偶然の事で、英字新聞に載る事になってからは、前フランス大使古垣鉄郎氏にもお目にかかり、多大のお骨折りにあずかった。当時古垣氏は朝日新聞社の社長の要職におられた。気さくな、親切な方であり、立派な学者でもあられた。翻訳を通して、岩田氏、古垣氏などという方に知己を得た事は、まことに光榮の至りであり、思えば若かった私がどの様にこの方々に接したかを思うと、汗顔の至りであり、三十年を経た今日、この大先輩の方々の御寛大、御親切に深く首をたれるものである。

翻訳の一部を論議に載せるのには、どの形式をとるべきかという点に迷った。原著は四二〇頁の長大なものである。一部を載せるとしても、その部分を扱ふのが一仕事である。又、こうしたものが軍国主義のリバイバルの様に考えられる事は私の意図に反する。最近グアム島で元日本兵が二十年間、木の実や川の魚を食べて、ロビンソン・クルーソーそのままの生活が続けていたのが発見されて大さわぎとなった。ある人は、これを見て戦争はまだ終わっていないという意味の事を述べた。戦争を知らない世代の若い人達は、全く想像を絶する事柄として啞然とした。好むと好まざるとに関わらず、平和論者である、ないにかかわらず、戦争の現実とはこうしたものであり、それを経てきた古い世代は、これを歴史とは見ず、昨日の悪夢の思いであり、これが二度と繰返えされない事を祈るわけであるが、戦争を知らない若い世代は、これを単なる歴史、過去の出来事として受けとめる、もしくは、愚かな事をしたものよと古い世代に不信の念を投げかける。現代の若い人達が、こうしたものをどの様に受けとるか、全く自由である。然し、この九軍神の事蹟は僅か三十年前の昭和十六年の出来事であり、この時代の二十才代の若者が生命を賭して、国に殉じた事を、唯単に若者の情熱にかられて、つっ走った結果であるという様な一部の人の考えには同感出来ない。国家危急存亡のあの時点に於ける若者の心理は、同じ日本人でありながら、昭和元禄と称される物質溢るこの現代では、想像を絶する社会状況の中にあつたことに思いを至さねばならない。僅か三十年の歳月の経過にもかかわらず、国家、乃至社会が置かれている状況が、かくも違ふと、かくも異質にも見える若者が生れる事に不思議を感じず

る人があるかもしれないけれども、私は、若者の本質というものは、昔も今も、変ってはいないと思う。この時代の歴史を――あえて歴史と言わして頂くなら――本当の意味で把握して頂きたい。そうした背景にあって、あの様に死んで行った若者が、我々の先輩の中にあつた事を考えて頂きたいと思う。平和な時代になつて思う事は、今日我々がこうして生命を得ている事は多かれ少かれ、こうした若い人達の捨石の様な生き方、死に方の中に受けつがれているのだという事は、たとえ、日本が一時、敗戦を味つたとしても、厳然たる事実であり、同胞として、かかる先輩がいた事を、もう一度はつきり思い出してもよいと思つた。又一つの歴史的事実として認識してほしいと考えた。五隻の、決して生きて還る事を許されない様な装備、人間魚雷にも等しい潜水艇に二人ずつ、全員十人が乗り込んで、即ち最微力の装備で、最大の効果をねらつて、敵艦数隻が錠をおろして定泊している真珠湾に攻撃をしかけた。その後にくる日本の戦艦戦力の消耗を早くも計算しての海軍の苦肉の策、陰謀とも言うべき戦略であつた。神ならぬ人間の、敗戦を喫する事は未塵も考えていない瞬間の若者の心であつた。あとに続く者あるを信じて、国を守る花と散つたのである。十人の中、九人が戦死を遂げた。その中、一人の生存者があつたはずである。この九人の軍神の華々しい戦死の蔭に、生き残つた一人の軍人の気持は察するに余りがある。ある意味では、この生き残つた人が主人公の小説の方がかかれる可能性がある。とにかく、衝激を受けた時氣を失つていた事だろう。米軍に収容され、治療を受けて、生還したと判つた瞬間の、その人の心はどの様なものであつただろうか。心中を企て、生き残つた者、いやそれ以上に悲痛なものであつたに違いない。現時点の私の目的はこの生存者に就い

てではないし、小説も、それにふれていない。それ故にこの生存者に関して、今は紙面を多くさくわけにはゆかないが、とにかく、戦時中は、この生還者には一言もふれていなかった。きびしい軍の検閲は、その発表を許さなかつたというより他はない。そして、戦後も、この生還者のテンダー・スポットに照明をあてる事をしなかつた。余りに残酷な事と思つての配慮かと思う。二、三の雑誌が僅かに取り上げたのみで沙汰やみとなつた。私は生還者の方が、世を忍ぶ様な氣持をもたれずに、おおらかに、平和に、寿命を完うされる事を祈つてやまない。

小説「海軍」は十二月八日、人間魚雷にも等しい小型潜水艦に二人ずつ一組になつて十人の海軍軍人が五隻に分乗して開戦当初、真珠湾を奇襲攻撃した九軍神の中の横山中尉――後、二階級特進で少佐となる――を中心に、中尉が死ぬ迄の二十二年と何ヶ月かの短い生涯を描いた小説であつて、真珠湾攻撃そのものの有様を描いているのではない。九軍神の一人横山正司中尉の短い生涯と戦死迄の背景となつた江田島兵学校及び日本帝国海軍の歴史がその中心となつていてと考えてよい。当時、平均年令二十三才、四人の海軍中尉と五人の下士官の莊烈な戦死は、翌年三月、各自、二階級特進という形式で当時の司令長官山本五十六大將を通して海軍省から発表されたものである。その五十六氏も昭和十八年五月二十一日に戦死され、幽明界を異にされた。

Aは小説海軍のかきだし「男ン子」の一部と、Bは佐久間艇長の遺書の部分を「血と涙の歴史」の章から抜きがきしたものであり、以上の二つの部分の拙訳をのせた。

A 男ン子 (以下小説の原文)

×

×

×

ヴェルサイユ条約が成立したのが、大正八年で巴里の市は、ありとあらゆる窓から、ありとあらゆる紙片を裂いて、コンフェッチの雪を降らせた。勝利の歓びよりも、平和の到来に感銘まつたらしいのだが、同じ年の十一月十八日に、鹿児島市下荒田の精米商谷真吉方で、一人の男の子が生れた。(これが九軍神の一人谷真人である―訳者註)

谷山街道に面した店さきで、大きな箕をふるってゐた真吉は、知らせを聞く前から、産声の高さと強さで、それを知ってゐた。

「男ン子や―さうちやったや」

五十才の父親は顔色を動かさなかつた。相変らず、米粉に塗れた箕を、振り続けてゐた。真吉は商人に似合わず、むくちな男だつた。近衛騎兵上等兵の肩書があつて、日清日露の両役にも出てゐる。しかし、彼が男子の誕生を聞いても林の如く静かだつたのは、べつにさういう経歴や、性質のためばかりでもなかつた。

早くいへば、彼も彼の妻のワカも子供の出生に、慣れてゐるのである。

今度産れた子供は十一人目だつた。女五人、男五人の子供が一人も欠けず健やかに育つてゐる。そしてお産はいつも軽い。子供は庭の柿の樹に実が生るやうに、自然に、また單純に生れてくる。そこへまた一人男の子が殖えただけである。真吉はそのように、淡々として、わが子の出生を迎えた。土地の風として、多産を恥ることも、嫌うこともなかつた。もとより、裕かな家計ではないが、子供を授けりものとして考える風習であるから、何人生れたところで、文句はないのである。況してや今度は、男の子だつた。

大正八年になつても、薩摩の国では、両性の間に、価値の懸隔が甚だしいのである。

(「ちやッどん、男ン子が生れると……」)

真吉が、ちよいと思案したのは命名のことである。長女はハル、次女はミツ、女の子の名は、ラク／＼と、命名したのに、男の子の場合はいつても苦勞するのである。長男は真蔵、次男は真一郎―それまではよかったが、続々と、後が生れるので、ついに面倒になつて、四男に四ノ吉はまだいゝとしても、五男に太郎は、すこし乱暴であつた。

今度はなんとか、氣の利いた名をつけてやりたい。なぜか、今度の子供の名は、等閑にできないような氣がするのである―

(「やっばい、おいが名を頒けちやりたい。真、真……真人がよか!」)

不思議なように、スラ／＼と美しい名が、頭へ浮んだ。真人、谷真人―なにやら、薩摩義士八十三名のうちにでもありそうな、由々しい名である。そして真吉の家は、平民だつた。

七夜の頃には、産婦のワカは、平生に変わぬ元氣で、褥の上から家中を指図していた。今年四十四になるまで、十一人の子を生んだ女といへば、どんな精力的な肉体かと想像されるが、至つて小柄な、瘦軀だつた。色も白く、肌目もこまかく、土地の女の常として黒髪が豊かだつた。といつて、美人と呼ぶには、頬骨が高く、唇が巨きく、艶治の表情が乏し過ぎた。ただ、昔の下つてゐることと、声の柔和なことが、彼女の印象を愛嬌づけた。それに、彼女は、小売商人の妻だつた。白米の外に、煙草・荒物・焼酎の類まで商つてゐるのだから彼女の物腰は低かつた。どこにも、賢婦風の

面影はなかった。そして、彼女も亦・平民の娘だった。理屈というものを知らず、権利ということを口にしない、平凡な伝統的な薩摩女だった。働くことと、信心と、子を育てることと、それ以外に、人生を求めない女だった――

「ハルどん……間も無、正午が鳴んど」

彼女は、またしても、産褥から長女に命令した。

「ハア」

父親に似て、寡黙なハルは、産部屋のすぐ前の、勝手土間で、唐芋を醬油で煮ていた。彼女は、十七歳だが、母親が臥てる間の炊事は、一切、引受けていた。十五歳の長男真蔵は無気力で、あまり手助けにならなかったが、十四歳のミツ、十三歳の真一郎は、家の掃除でも、店の品物の配達でも、結構役に立った。手のかゝるのは、二歳の太郎ぐらいで、子沢山の家は、案外家事の整頓してるものである。お産の時は、いつも、人を雇わずに済ませた。

「ハルどん……加治木屋さアへ、焼酎届けたや」

「はア。一升……」

母親は、いふべき用事がなくなると、安心して、黒光りのする天井を眺めた。町家といつても、半ばは、農家の建築に近かった。土間が広いので、建坪の割りに、産部屋を入れて、三間――それと、二階に物置風の小室があるが、子供の勉強部屋としか用途がなかった。夜になればその部屋々々へ、十三人の家族が充滿するが、今は、ヒツソリとして、昼の鶯の声が、與次郎ヶ浜から聞えるだけだった。

ふと、隣りに臥てる真人が、高い声を揚げた。お産に慣れた母親は、そ

れが便意でなくて、飢を訴えることを、すぐ聞きわけた。

彼女は、胸を展げて、乳房を含ませた。齡に似合はぬ、瑞々しい乳房だった。だが、それよりも驚くべきことは、乳房をもち添える彼女の手だった。節くれだった、古い野球グローブのような、大きな指と掌だった。二十四歳で嫁にきて、今日まで二十年間、あらゆる働きを働き続けた女の手だった。

真人は、健かに育った。

手のかゝらない子供が多かつたうちにも、これほど、手のかからない子供はなかった。四ノ吉が、ずいぶん、温和しい子供だったが、よく下痢をして心配をかけた。真人は、クリクリ肥ってるわけでもないのに、不思議と、虫気もなく、腹も壊さなかった。乳がほしくなると、猛然と泣くが、満腹すれば、すぐにスヤスヤと眠った。眼が覚めれば、ひとりで手を動かして、遊んでいた。そして三月経たないで、笑い始めた。

よく笑ふ子供だった。色の白いことと、眼が細く、眈の下つてるところは、確かに母親譲りだった。唇が朱く、ボツトリと、優しく閉ぢてるのは、父親に似ていた。誰が見ても、表情を崩さずにいられないほど、可愛い赤坊だった。そして、知らぬ人を見ても、ニッコリ笑ふ愛嬌は時として彼女の子と間違へさせた。

「はら、なんち、可愛か赤ちゃんそかい。やがつ、よい嫁女イないやんそ」ミツが、真人が負って、往来で遊んでると、そんなことを話しかける、お内儀さんもあった。

三歳の祝いの時には、母親が抱いて、郷社の八幡社へ参詣した。尤も、

ワカは、その年に、十二番目の真彦を生んで、いよく^{よく}身边が忙しかったが、七五三の参詣だけは、欠かされなかった。彼女は紋服に身を更めて、古い根元が六稜になつて石鳥居を、潜った。丁寧に手を洗い、口を漱ぎ拝殿の前で、長い祈念^{きねん}を凝らした。べつに、なにをお願いするわけでもなかった。ただ、一心に拝むのである。男の子の場合は、いつも、そうして長く拝むのである。

荒田八幡宮は、由緒のある社で、現在の社殿は、島津十五代の貴久の造営になつてゐるが、奉祀は遙かに古いらしい。九月二十三日の祭礼には、浜下りの行事があつて、鹿兒島の名物となつてゐたが、今は廢れた。ただ、宝殿の下白砂を、蝮蛇^{むしよ}除けとする風習は、今なお続いている。「当社は蝮蛇を惡み給ふとて、荒田一村その虫絶えてなし」と、古記にあるが、この付近に長虫の少ないのは、確かな事実である。この産土^{うぶすな}神に対する郷民の尊崇はまことに篤く、真人が、後年海軍軍人となつてからも、帰省の度に、社前に額^{ぬか}くことを忘れなかった。

真人は、五歳の時にも、木綿の紋附を着せられて、祝いの参詣にきた。真彦は、生後三箇月にして歿したが、八男の末雄がその年に生れてゐた。しかし末雄の名が効いたのか、ワカの長い出産の生活もそれが最後だった。そして真人が、七歳の祝いを迎へるまでには世間もだいぶ變つてきた。関東の大震災があつた。東京で、ラジオといふものが、始まつた。また、それより以前に陸奥と長門の二艦が、帝国の海上に浮んでゐた。

B 佐久間艇長の遺書（以下小説の原文）

「……引揚げには、種々の困難が伴つて、浅瀬に曳いて、輕荷状態にした

のは、十七日の午後一時だった。

当時の潜水艇の設備からいつてそれだけの時間を経過した後に、生存者があることは、誰も予期できなかった。問題は、帝国海軍初の潜水艦遭難事件に、乗組員がいかにして死んだか、ということであつた。実は、その少し以前に、某国海軍に同様の事件があつて、乗終員の甚しい醜狀が世間の眉をひそめさせていたからである。

真ッ先に、六号艇内に飛び入つた吉川中佐と中城大尉の心中は、悲しみのうちに、相当、複雑な緊張があつた筈である。ところが、狭い艇内を一巡した中佐は、「よろしいッ！」と絶叫したと思うと大声を揚げて、泣き出してしまつたのである。

佐久間大尉は、艇長の居所たる司令塔の中に、原山機関中尉は電動機の側に、鈴木上等機関兵曹はガソリン機関の側に、舵手は舵席に、空氣手は圧搾空氣罐の前に、それ〴〵の部署を、一寸も離れず、見事な最後を遂げてゐた。ただ二人だけが部署を離れてゐた。長谷川中尉と門田上等兵曹の二人だった。ところが、二人の死体が横はつてゐたのは、ガソリン・パイプの破れた箇所だった。二人が部署を離れたのは、烈しいガソリンの臭氣と斗つて、最後まで、その噴出を遮ろうとした結果であることが、証拠立てられた。

吉川中佐と中城中尉が男泣きに泣き崩れたのは、当然のことであつた。

これ以上に、殉難潜水艦乗りの立派な死に、方^{かた}を考えられなかったからである。「よろしいッ！」吉川中佐のその一語は、実に、簡にして、あらゆる批判と感動をいい尽したものである。中佐達の後には、母艦豊橋の軍医長

や看護部員が、艇内に入って、規則的な検視をしてから、死体を厚く毛布で包んで、豊橋に収容した。そして艦員は、泣きながら、十四の遺骸に、新しい軍服を着せた。やがて豊橋が静かに呉へ入港した時には、司令長官の特令によって、すべての在船艦艇が登舷礼式をもって、これを迎えた。

しかも佐久間艇長への尊敬と哀悼は、やがて十倍にも、昂まらねばならなかった。それは艇長の軍服ポケットから、一冊の手帖が発見された時からである。発見者は、鉛筆の走り書きに過ぎないその手帖を、艇長の私事の備忘ぐらゐに思つて、さして重要視しなかったが、やがて熟読してみて驚いた。それは古今を貫く大遺言書だった。あの環境に於て、あの運命に於て、人間がよくもこれだけのことを書き得たと思わせるほど、前例のない意志と義務感の勝利に輝く遺書だった。

沈没と同時に電燈が消えて、パイプ・ホールから、わずかに洩れてくる微光の下で、佐久間大尉は、ガソリンの悪ガスに喘ぎながら、それを書き了えたのである。沈没の原因、沈没後のあらゆる経過を報告し、その上、潜水艦の将来を思い、また上官として部下への情誼、先輩への告別、最後の意識が消える瞬間の時刻まで、洩れなく書き遺している。

超人とは、まさに、大尉のことである。その時、大尉の齡三十一才、愛妻は前年に歿し、二才の遺女あるのみであった。

「小官ノ不注意ニヨリ、陛下ノ艇ヲ沈メ、部下ヲ殺ス、誠ニ申訳ナシ、サレド艇員一同死ニ至ルマデ皆ヨクソノ職ヲ守リ、沈着ニ事ヲ処セリ、我等ハ国家ノタメ戦ニ斃レシト雖モ唯々遺憾トスル所ハ天下ノ士ハ之ヲ誤リ、以テ将来潜水艇ノ發展ニ打撃ヲ与フルニ至ラザルヤヲ憂フルニアリ、希ク

ハ、諸君益々勉勵以テ此ノ誤解ナク将来潜水艇ノ發展研究ニ全力ヲ尽サレシコトヲ、サスレバ我等一モ遺憾トスル所ナシ

沈没の原因

瓦斯林^{ガゼット}潜航ノ際過度深入セシタメ「スルイス・バルブ」ヲ締メントセシモ、途中「チエン」切レ、依テ手ニ之ヲシメタルモ後レ、後部ニ満水セリ、約二十五度ノ傾斜ニテ沈没セリ

沈没後ノ状況

一、傾斜仰角約十三度位
一、配電盤浸リタルタメ電燈消エ、電纜燃エ、悪瓦斯ヲ發生、呼吸困難ヲ感ゼリ、十四日午前十時頃沈没ス、此ノ悪瓦斯ノ下ニ、手動ポンプニテ排水に力ム

一、沈下ト共ニ「メン・タンク」ヲ排水セリ、燈消エ「ゲージ」見エサレドモ「メン・タンク」ハ排水シ終レルモノト認ム、電流ハ全ク使用スル能ハズ、電液ハ溢ルモ少々、海水ハ入ラズ、「クロリン・ガス」發生セズ、残氣ハ五〇〇磅^{ポンド}位ナリ、唯々頼ム所ハ手動ポンプアルノミ（右十一時四十五分司令塔ノ明リニテ記ス）

溢入ノ水ニ浸サレ乗員大部衣湿フ、寒冷ヲ感ズ、余ハ常ニ潜水艇員ハ沈着細心ノ注意ヲ要スルト共ニ、大胆ニ行動セザレバ其ノ發展ヲ望ムベカラズ、細心ノ余リ畏縮セザランコトヲ戒メタリ、世ノ人ハ此ノ失敗ヲ以テ或ハ嘲笑スルモノ有ラン、サレド我ハ前言ノ誤リナキヲ確信ス

一、司令塔ノ深度計ハ五十二ヲ示シ排水ニ勉メドモ十二時マデハ停止シテ動カズ、コノ辺深度ハ十尋位ナレバ正シキモノナラン

一、潜水艇員士卒ハ、拔群中ノ拔群者ヨリ採用スルヲ要ス、カカル時ニ

困ル故、幸ニシテ艇員ハ皆ヨク職ニ尽セリ、満足ニ思フ

我ハ常ニ家ヲ出ズレバ死ヲ期ス、サレバ遺言状ハ、「韓崎」ノ引出シノ中ニアリ（但シ私事ニ関スルコト言フ必要ナシ、田口浅見兄之レヲ愚父ニ致サレヨ）

公遺言

謹ンデ

陛下ニ白ス

我部下ノ遺族ヲシテ窮スルセノナカラシメ給ハンコトヲ、我ガ念頭ニ懸ルモノ之アルノミ左ノ諸君ニ宜敷（順序不順）

一、齊藤大臣——（筆者註、以下諸先輩ノ氏名略）氣圧高マリ鼓マク破ラルル如キ感アリ（再ビ氏名記シアリ）

十二時三十分呼吸非常ニ苦シイ

瓦斯林ヲ「ブローアウト」セシ積リナレドモ、ガソリンニ酔フタ

一、中野大佐（註、氏名の追記ならん）

十二時四十分ナリ」

以上が佐久間大尉の遺書である。

日蓮における女性の救済

中 尾 堯

一

日本の歴史をとおして、名僧知識といわれる、じつに多くの有名な僧侶があらわれた。かれらのある者は、きわめて高いレベルの宗教哲学をひらき、仏教の教理や思想の面で大きな役割をはたした。またある者は、その時その時の権力者と結びついて、大土木工事をおこしたり、政治の舞台で活躍したりして名をなした。

仏の説く教えの眼目は、しかしながら、すべての人びとの心を、絶對的に救うことであつた。きびしい現実の生活の中に呻吟する人びとの心に、仏の救いの証言をつたえ、精神的な自由の世界にひき入れることであつた。みづから進んで民衆と交わり、仏の福音を伝え、一人ひとりの心に信仰の灯をともしていった、かがやかしい僧侶の群像が、日本の歴史にはある。日蓮もその一人であつた。

日本の宗教家のうちで、日蓮ほどさまざまな形で受けとられたものはないであらう。かれの、幕府に対するはげしい諫めのことばと、その結果か

れが受けなくてはならなかった壮烈な法難が、思想とはまったく別に、あまりにも強調され、ただけしだけの日蓮像が作りあげられたことはしばしばのことであつた。行動は、とかくするとその行動の原理とはまったく関係なく、勝手に解釈されるというところがある。

日蓮は、「立正安国論」を幕府に差し出して、幕府のおこなう政治の根本理念が仏の真意にそわないから、さまざまな災害が起こるといさめた。日本の国を平安に治めようとするには、法華経の信仰ただひとつに従えよというのである。幕府は、このような主張をする日蓮に対して、佐渡流罪をはじめとするきびしい迫害をもって答えた、法難に明け暮れる苦しい生活の中で、日蓮は、しかしながら確実に信者をふやしていった。

日蓮のまわりに集まつてきた信者たちは、武士とその妻や家族の者が多かった。しかし、かれらのすべてが、天下国家の政治と宗教のあり方に想いを寄せ、日蓮の説く高遠な教説に共鳴してやってきたのでは、決してなかった。むしろ、かれ自身の、きわめて具体的な日常生活における不安からの宗教的脱出、つまり救済の証言を求めてきたのである。日蓮は信者た

ちのこのような要請に応えてかなければならなかった。

釈迦が、その一生にわたる教説の真意を伝えようと、最後に説いたのが「法華經」である。日蓮はこう信じた。法華經には、仏の絶対性と永遠性が、くり返しくりかえし説かれている。また、法華經を信じ、その教えにしたがって行動する者は、仏の手によって救済されることを確信をもって説いている。日蓮は、この法華經の思想を、仏を信ずること（信）と法華經の實踐（行）との立場で把えた。けっして、高度の学問や知識を要求したのではなかったのである。このように、信と行にもとづく信仰のありかたは、一文不知ともよばれる、当時の人口のほとんどを占める民衆たちに、容易に受け入れられるものであった。日蓮はまた、法華經の信仰を前提としながら、混乱の社会において、悩める民衆が真に求める真の救済とはいったい何であろうかと、つねに自分に聞き、みずからこれに答えようとした。かれが民衆にむかつて説く法華經の教えは、実に確信にみち、具体的なものであった。日蓮と、老若男女を問わぬ民衆との対話は、こうして生まれ、そこに宗教的な共感がよび起されたのである。

日蓮は、実に多くの手紙を認め、今日に残している。身延に移ってから、地方の信者に手紙をもって信仰の指導をおこなった。まさに文書伝道のさきがけともいえる。この手紙の文章のなかに、法華經のために幕府の権力に堂々と立ちむかう日蓮とは、まったく別の面をうかがうことができる。とくに、女性信者に対するこまかな心づかいと、その中にあふれる法華經への、ひたすらな信仰の心がよく読みとれるのである。

二

建治二年（一二七六）三月のこと、日蓮の生まれ故郷である安房国（千葉県）天津に住む光日という女性から、甲斐国（山梨県）身延の地に隠棲している日蓮のもとに、一通の手紙がとどいた。日蓮は、故郷の人からの手紙を、封を開くのもどかしく文面を読んだが、それは一昨年の六月八日に、子息の弥次郎に先立たれたという、悲しい知らせであった。

弥次郎は、かつて日蓮のもとを訪ねて、いろいろと人生のこと、信仰のことなどを話したことがあった。かれはこの時、つぎのように自分の悩みを告白している。

「世間は無常である。いつ命を失うかまったくわかりはしない。その上、自分は武士であって、主人に従う身である。また、近ぢかのうちに戦場に出て、敵とたたかうことを命じられるに違いないし、その義務からのがれることはできない。このような次第であるから、後生のことが恐しくてならない。どうか助けて下さい」。

日蓮は、法華經の教えをひいて、弥次郎にいろいろと説き聞かせて、安心を得させようとした。その時、かれがもっとも心配していたのは、夫を失った母に先立つなげきであった。武士の身として、避けることのできない運命に、深い悩みをいだいたかれは、自分の犯さざるを得ない罪業と、死後、地獄におちいるに違いないという、心の不安からのがれようと、日蓮のもとに救いの証言を求めてやってきたのである。

弥次郎の後生の恐れは、またその母の恐れでもあった。光日は、日蓮への手紙のなかで、亡くなったわが子がいたいどこに生まれているのだろうか、歎いていった。「（弥次郎は）人をもころしたりした者であるから、死んだ後、どのような世界に生まれておりましようか。仰せを受けたいと

思います」と。日蓮は、武士としての弥次郎の罪の大きさをその母に語った。

針は水に沈む、雨は空にとどまらず。あり（蟻）を殺せる者は地獄に入り、しかばね（屍）を切れる者は惡道をまぬがれず。いかにいわんや、人身を受けたる者を殺せる者をや。

いかにそれが武士たるものの、免れることできない運命だとしても、人を殺したりすることは、もっとも重い罪にほかならないのである。しかし、このような罪深い弥次郎も、りっぱに救われる道があった。ただ一つ、法華經の信仰によって。

故弥次郎殿は、たとい惡人なりとも、うめる母、釈迦仏の御宝前にして（弥次郎の後生を）昼夜なげきとぶらわば、いかでか彼人うかばざるべき。いかにいわうや、彼人は法華經を信じたりければ、をや（親）をみちびく身とぞなられて候らん。

亡くなった弥次郎が、どんな惡人であったとしても、その母光日が釈迦仏をまつる仏壇の前で、故人の助からんことを願って信心を捧げる時、どうして故人が浮かばれないことがあるうか。いや何よりも弥次郎は法華經を信じていたではないか。その弥次郎が、どうして救われないことがあるう。

日蓮は、わが子の死後の不安におののく光日にむかって、法華經による救済の証言を、はっきりと与えたのである。戦場に夫と子を失った光日は、日蓮のこのことばに、どんなにか勇気づけられ、はげまされたことであろう。このち彼女は法華經の信仰に日夜精進したのであった。

これから三年のちの弘安三年（一二八〇）九月十九日、日蓮が光日にあ

てた手紙が、断片ながらのこっている。

三つのつな（綱）は今年にきれぬ。五つのさわり（障）はすではれぬらん。心のくもりなく、身のあか（垢）き（消）えはてぬ。即身の仏なり、とうとしとうとし。

短い文章ではあるが、日蓮によって法華經の信仰に導かれた光日が、世のさまざまなかまりや苦しみを超越して、清らかな信仰の境地に辿りついていたことをよくうかがうことができる。法華經の信仰に支えられた光日の姿は実にとくとく、即身の仏のようにもみえたのであった。

鎌倉時代の武士の社会では、一家の中心となる夫を、後をたのむべき男子を、しばしば戦場や事故などで失って、わが身一人の孤独な立場になる事が多かった。日蓮は、こうしてのこされた妻や母たちにむかって、故人が法華經によって救われるにちがいないという確信を与えた。この世とあの世と界を異にすれども、仏の説く法華經のきずなによって固く結ばれている夫婦・親子の縁を強調したのである。

弘安三年（一二八〇）九月、上野殿後家尼は、夫の死後ただひとつの望みをかけてきた子息の七郎五郎を、とつぜん失ってしまった。このことを聞きおよんだ日蓮は、さつそく手紙を上野殿後家尼につかわし、七郎五郎の死をいたみ、つぎのようにしたためた。

いとをしきてごご（子）、しかもをのこご、みめかたちも人にすぐれ、心もかいがいしくみえしかば、よその人もすずしくこそみ候しに、あやなくつぼめる花の風にしばみ、満月のにわかに失せたるがごとくこそをぼすらめ、まこととををぼえ候わねば、かきつくるそらををぼえ候わず。人なみすぐれた青年（当時十六歳の若者であった）のわが子を、とつぜ

んに失つたその母と、深い悲しみをわかちあおうとする日蓮の厚い哀情が、この文面にあふれている。日蓮はこの亡き青年七郎五郎と、わずか二か月ほど前に身延の山中で会つたばかりであつた。この時日蓮は、「あはれ肝ある者かな、男也男也」と、おおいにたのしく感心したものである。

三

七郎を失つたこのような悲みは、けつして尽きることはあるまい。しかし、生前において釈迦仏・法華経の信仰に身をいれて打ちこんでいた七郎五郎は、その臨終のありさまが実にりっぱであつたという。「亡き人は今その父とともに、法華経に説く靈山淨土に参つて、手とり頭をあわせて悦んでいるに違いない」と、日蓮は法華経の信仰による救済の証言を、その母に示すことも忘れなかつたのである。

やがて、故七郎五郎の四十九日の忌日がやつてきた。日蓮はこの日、故人の菩提をとぶろうために、法華経一郎、自我偈数度、題目千遍を唱え、その母にあてて、とぶらいの手紙をしたためた。いましばらく、その格調高い名文に、日蓮の心をうかがつてみよう。

(夫を失つたのち)二人のをのご(男兒)こそにな(荷)われめとたのもしく思い候いつるに、今年五月五日、月を雲にかくされ、花を風にふかせて、ゆめかゆめならざるか、あわれひさしきゆめかなとなげきを取り候へば、うつつににてすでに四十九日はせ(馳)すぎぬ。まことならばいかんせんく。咲ける花は散らずして、つぼめる花の枯れたる。をいたる母はとどまりて、わかき子は去りぬ。なさけなかりける無常かな無常かな。かかるなさけなき国をばいといすてさせ給いて、故五郎殿の

御信用ありし法華経につかせ給いて、常住不壞の靈山淨土へとくまいりさせ給え、父は靈山にまします。母は娑婆にとどまれり。二人の中間におわします故五郎殿の心こそをもひやられて、あわれにをばえ候え。

わが子を失つた母の、深い悲しみと無常感を美しくとらえ、法華経の信仰によつてこれを踏み越えた、救いの境地を物語っている。むかし、釈迦が尊い法華経を説いたといわれる靈山淨土へ、故上野殿(夫)はすでに往きついている。母はこの世にとどまつている。まったく世界を異にする娑婆と淨土の中間に、亡き七郎五郎は、いったいどのような氣持でいるのだろうか。日蓮の手紙は、深く深く人の心の奥底に迫つてくるのである。

日蓮は、夫と子に先立たれて悲しみに沈む女性上野殿後家尼の心を來世に向け、法華経の信仰を機縁とした、親子ともどもの、絶対的な、現世を越えた救済を力説したのである。ここには、夫婦・親子というような、現世における家族のきずなが、法華経の信仰をもとに來世にまでくりひろげられていく。遠くの世界へいつてしまった夫が、子が、じつは現実を越えた靈の世界で、しっかりと手を結びあっていることを悟つた時、彼女たちの心はどんなに救われたであらうか。

ところで、日蓮が上野殿後家尼と、亡き七郎五郎に寄せた情は、単に宗教に勧誘するための手段ではけつしてなかつた。それは、胸をえぐるような悲しみの心であり、確信をもつた救済への証言でこそあつた。

その翌年の弘安四年のころ、身延の地の寒さに健康をそこねていた日蓮は、上野殿後家尼から米・酒などの供養を受けた。これを感謝して認めた手紙の末尾に、日蓮は次のように書きつけた。

日蓮は所勞(病)の故に、人々の御文の御返事も申さず候、この事(七

郎五郎のこと）はあまりになげかわしく候えば、筆をとりて候ぞ、これも、よも久しくもこの世には候わじ、一定五郎殿にゆきあいぬとをぼえ候、母より先にけさん（見参）し候わば、母のなげき申つたえ候わん。病の身のために、人々の手紙にも返事をしたためることもできない。けれども、七郎五郎のことについては、あまりにも歎かわしいので筆をとった。それというのも、そんなに久しくこの世に生きてはおれないからだ。恐らく八郎五郎殿と靈山で会うことも近いことであるに違いない。もし母、後家尼より先に私が靈山におもむくことになったら、七郎五郎殿に母の歎きを申し伝えましょう。

日蓮のこの手紙を受けとった上野殿後家尼は、いったいどんな感激にうちふるえたであらうか。こうして、日蓮を導き手として、現世と来世を越えた靈的世界において、法華経による信仰のきずなが固くむすばれたのである。

鎌倉仏教における日蓮の果たした役割を考える時、われわれは、かれの人間味あふれる心と、力強い救済の確信のことばに、いまいちど耳をかたむけなくてはならないのである。

菩薩像の円形肩飾りについて

田 所 政 江

I



図 A

中国の菩薩像において、その両肩にかかる天衣の部分に、円い飾りを立て、そこからリボン状のものを垂した、いわば円形肩飾りとも称すべき肩飾りを付けた菩薩像をみることができ(挿図A)。

かつて私は仏教美術が中国に入り次第に中国化していく問題を、菩薩像の服飾の面から考えてみよう(1)と試みたが、そうした一連の問題の中で、この円形肩飾りも浮び上った対象である。しかし現在のところ、この円形肩飾りについて注目する人は少なく、したがってその起源等についても明らかにされてはいないようである。

本稿では中国菩薩像にみられる円形肩飾りの起源や盛行期間、またその変化発展する形態等の問題を取り上げ、この円形肩飾りを通して、ひきつづき仏教美術の中国化の問題を考えてみたい。

II

中国の菩薩像が付いている円形肩飾りの祖型を求めるに当たって、それが中国の造形の中にあっただろうかといった点をまず考察することにした。そこで肩の辺りに付けられたものが問題となるわけであるが、たとえば漢代の画像石の中には天上界の人物や動物にはすべて翼を持たせた造形(図1)があり、その作例を数多くみることができる。しかしこの翼は天上界と地上界の区別を示す標識である。また漢・永平十二(六九)年漆案の西王母(2)や三国時代の仏獣鏡の仏や神獣鏡の神仙(3)の肩に羽毛のようなものが翻っている。しかしこれらの作例にみられる羽毛も、人間とは異なる属性あるいは能力を示したものとされている。したがって以上の諸例にみられる翼や羽毛は、形態の上からも、中国菩薩像の円形肩飾りの祖型とす



図 1



図 2



図 3

ることは無理のように思われる。

つぎに雲岡石窟では、仏像の光背のその肩の三角形の部分に、火焰の描かれた作例(図2)がある。なおこの火焰については肩光とも称されている。

このように光背の肩の辺りに火焰を描く作例はキジールや敦煌の壁画にもみることのできるものである。おそらく、雲岡の場合のそれは西方からの影響によるものであろう。さらに光背ではなく、肩から直接火焰を出す仏像がある。

アフガニスタンのショトラク出土の定光仏本生譚の浮彫の仏(図3)や、パイダヴァ出土の石彫仏坐像等はいずれも背後に火焰を負い、シュラヴァステイ(Cirvasti)神変を意味するものとされている。そしてこの辺りの地方がこの本生譚の起源とされ、したがって出土例も多いといわれており、またこれら肩に火焰を有する仏は、西域、中国にも及ぶ造像形式とされている。

さて仏の場合、肩の火焰は身体から火や水を出すという釈迦の神変の説話



図 4



図 5



図 6

(シュラヴァステイ神変)を表わすための一つの具体的な表現であり、それは意味をもつものである。これに対し、菩薩像の円形肩飾りは仏の場合のような意味をもつとは思われない。したがってこれら仏の肩の火焰も、円形肩飾りの祖とは考えられない。

また菩薩像の服飾は貴人の服飾をモデルにするといわれており、こうした観点から『歴代帝王図巻』を眺めてみると、魏文帝曹丕・吳主孫権・蜀主劉備・晋武帝司馬炎(図4)・隋文帝楊堅のそれぞれの肩の辺りに円紋風のものがある。しかし帝王図巻は唐代の閻立本の筆とは伝えるが、幾度かの加筆補修があり、宗代・仁宗頃の模本といわれている。したがって魏・晋頃の帝王の服飾を果してどこまで伝えているか疑問であり、また紋という平面的な形の上からも、この円紋も菩薩像の円形肩飾りの祖型とすることには躊躇される。しかし貴人の服飾の肩に、なにかシンボルとなるようなものを付

けるといった現象としてこの円紋を取り上げれば、これは菩薩像の円形肩飾りの背景として、あるいは多少なりとも寄与しているといえよう。

更に東晋・永和十三(三五七)年の冬寿墓の寿夫人(図5)の二の腕の辺りや、西凉(三六四年頃)のアスターナ古墳出土の画稿・宴楽図の中の婦人像の肩の辺りに布片⁽⁹⁾のようなものが描かれている。寿夫人のそれはゆつたりした衣裳を腕の所で結ぶといった働きも、あるいはあったかもしれないが、衣裳の飾りとしての役割の方がより強かつたのではなからうか。ところでアスターナの場合の布片は単なる装飾であらうか。それともなにか身分のようなものを示しているのであらうか。それは神獸鏡の神仙の肩にみられた羽毛とも一脈通ずるもののようにも思われるからである。しかし、これはやはり女史箴図巻(図6)の中にみられる領巾⁽¹⁰⁾の方に、より近いとも見受けられる。ともあれ、これらの布片が円形肩飾りの直接的な祖型とすることはできないにしても、衣裳の上の肩の辺りに布片を飾るという伝統が、菩薩像の肩に円形肩飾りを取り入れるという思想的背景として作用したと思われる。

さてこの円形肩飾りの直接的な祖型が中国には見当たらないとすれば、外来物とする仮定が許されよう。

III

五・六世紀頃と推定されるオクサス流域のバライック・テペの壁画の中に、袖のないコートを羽被った貴婦人が描かれている。そしてそのコートの前身頃の、ちようど和服の羽織の紐にあたる辺りに、円環があり、その中央から二本のリボンがさがっている(図7)。この円とリボンは単なる

衣裳の飾りであらうか。あるいは両方のリボンを前で結び、コートが落ちないようにするといった機能をも受けもつものであるか。それとも別の意味があるのか、現在明らかにすることはできないが、ともかくこのリボンはササン系のものであることはできよう。それはそれとして、この円とリボンというワンセットとしての形態に注目したい。それは敦煌の北魏代の石窟(四三三窟)の菩薩像(図8)が、バライック・テペのそれとよく似た形の耳飾りを付けているのである。

図 7

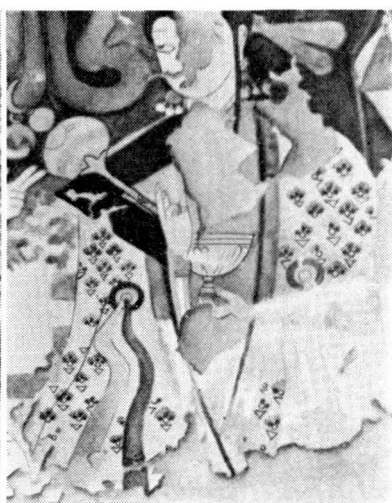


図 9



窟(四三三窟)の菩薩像(図8)が、バライック・テペのそれとよく似た形の耳飾りを付けているのである。既によく知られているように敦煌の北魏代の窟は西方的要素が強く、それは天衣の場合でも明らかであった⁽¹¹⁾。そしてバライック・テペのそれと敦煌の耳飾りとを直接結びつけることは危険にしても、この北魏代の敦煌の耳飾りが西方系のものであることはできよう。ともかくバライ

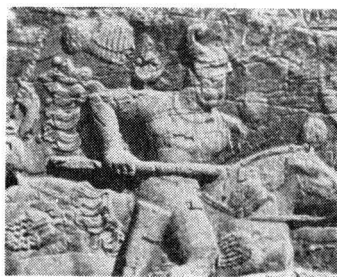


図 11

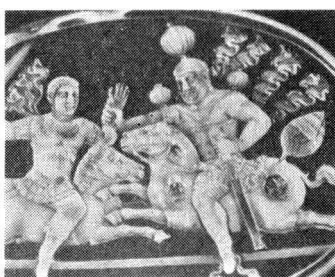


図 10

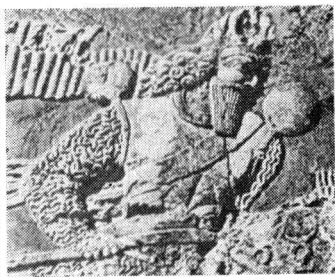


図 9

ック・テペにみられるような西方系の円とリボンをワンセットにした装飾法が東漸して、菩薩像の耳飾りや肩飾りに採用されたと推察することができる。

ただ現在、このような円とリボンとをワンセットにした装飾法の作例が少く、したがって別の角度から更に検討する必要があるように思われる。そこで円形肩飾りを円とリボンとに分け、それぞれの祖型について考えてみたい。

〔円の祖型〕

ペルセポリスの南西・フイルザバードには三世紀の「アルダシール一世の戦勝」記念摩崖浮彫があり、その浮彫の騎士の両肩に、球体の飾りを見ることが出来る(図9)。

また三世紀の「ローマ皇帝ヴァレリアヌス皇帝捕虜の図」のカメオの浮彫(図10)や四世紀のペルセポリスの北東・ナクシェ・イ・ルスタムの「ホルミズド二世の勝利」(図11)にも、同じような球体の肩飾りがみられる。後者の二例は「アルダシール一世の勝利」をモデルとしており、好んで用いられた主題とされているが、この球体は冠

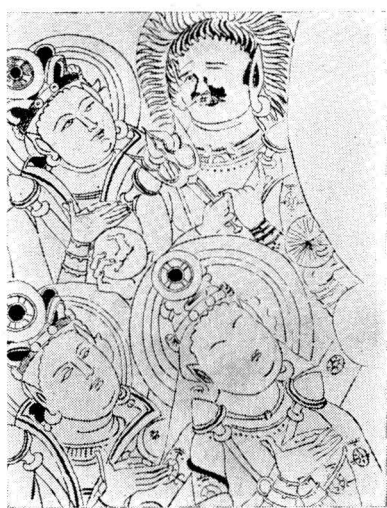


図 12

た光明の聖霊)の象徴か、それとも天空あるいは太陽を象徴するものか」といった推定がなされている。しかし肩の球体が、冠と同様の意味を有したかどうか明らかにすることはできないにしても、ただこの球体がササン朝において愛好されたらしいことは、たとえば馬の頭にも付けられていたということでもわかる(図11参照)。

これらササン朝の球体の発展形式とは断定できないが、キジル壁画中に、肩飾りを見ることが出来る。第三区、マヤ洞第五寺院前室左壁には、仏陀を中心に九人の付添人に囲まれた説法図が描かれている。ル・コックはこの壁画の第三ラインの黒い神(図12)を次のように解説している。

「彼(黒い神)は Satyahren を持ち、軍隊用の衿と、ドングリ状の肩飾りのついたササン風の甲冑を着ている。この珍らしい飾りは注目に値する。何故なら、それは中国の唐時代における粘土製の方相や天王の肩の上にある円錐形の焰の束の手本⁽¹³⁾となっているからである。そして、彼らは全く誤解されて受け入れられた、あるいは変化を持たせたササン朝

にも見受けられるものである。冠の球体、すなわちコリュンボスについて「絹地で包んだ結髪か、また天空もしくは地球の具現、あるいはフヴァルナ(アフラ・マズダによって作られ

の甲冑を着ているのである⁽¹⁴⁾。

ル・コックはこのドングリ状の肩飾⁽¹⁵⁾の起源を「古代に由来した身体の上で交差する飾りの鎖になにか関係するところの、その一つの発展形式」と推測しているが、「身体の上で交差する飾りの鎖」とはなにを指しているのであろうか。ちなみに二・三の例をあげてみると、バビロン第一王朝頃（前二千年頃）の豊饒女神⁽¹⁶⁾がX字状の装身具を付けている。またインドのサンチーやバルハットのヤクシーにも、身体の上で交差する鎖が見られ、このX字状璎珞には両肩の部分にもメダル状の装飾が付いている。このX字状璎珞は中国の菩薩像のX字状天衣の祖型であると推定したものであり、菩薩像とは関係深いものではある。あるいはまた、前述のカメオ⁽¹⁸⁾（図10）の中の人物にも身体の上で交差する飾りを見ることができ。

以上の諸例の中に果してル・コックの想定した「身体の上で交差する飾りの鎖」といわれるものがあるかどうかはさておき、カメオの人物の場合は、両肩に球体があり、キジールのドングリ状肩飾りの起源に一番近いものとはいえないだろうか。また、ル・コックの解説にもあるように、キジールのこれらの神々はササン風の甲冑を着ており、したがって、この肩飾りもササンと関係があるのではないかと思われる。前述のササン朝の球体の肩飾りと、キジールのドングリ状の肩飾りとは同じササン風の甲冑の上の肩飾りである点や、立体的な丸い肩飾りである点が両者に共通しているものである。すなわち、このドングリ状の肩飾りはササン朝の球体の肩飾りの発展したもの、つまり西域化された肩飾りと推量される。

ともかく、ササン系の球体の肩飾りが、肩の上に出ている丸い飾りであることや、西域にも流入した飾りであると思われること等から推定して、



図 13

中国の菩薩像の円形肩飾りの成立に関与しているとされよう。が、もし以上の球体がその祖型ではないとすればつぎのようなものも考えられる。



図 14

二世紀のバクダートの北西・ハトラから出土した「鷲を従え旗章を掲げた太陽神の胸像」^(図13)という浮彫の太陽神の肩のところには、鷲と思われる紋章風の飾りが付いている。また六世紀末から七世紀初のハマダインの西・タク・イ・ブスタン石窟の門のニケ神像の浮彫^(図14)には、その肩に、衣服に襷をよせて止めたような装身具が付けられている。次に彫刻ではないが、五・六世紀頃のパーミヤン石窟の三十五米石仏龕の頂上に、左右帯状構図の壁画があり、その中のいわゆる「飾られた仏陀」^(図15)といわれている仏の両肩に、紋風の装飾が認められる。



図 15

これは三つの尖端のある肩被⁽²⁰⁾いの上の飾りであるが、これについて述べられたものは現在のところ知らない。あるいは仏の靈力を示す一つの表現であらうか。ともかく判然とはしないが円紋風のものが付いている。

以上の諸例が示す紋章風、あるいはブローチ風の飾りは、肩のところにあり、また衣裳の上の飾りであることから円形肩飾りの祖型と考えたい。しかし肩の上の立体的な飾りではないという点で、やはりこれらはササン系の肩の球体の場合より弱いといわざるをえないように思われる。

〔リボンの祖型〕

リボン装飾というのはササン朝において愛好され、その軽快な装飾法が好まれたのか各地に波及していった。その代表的なものに冠のリボン装飾があり、パーミヤンやキジールの壁画にもみられ、また中国にも流入したものである。

こうしたササン系のリボンと思われるものに、前述のバラルイック・テペ壁画中の男子の項に、二本のリボンの翻えるのがみられる(図16)。ところで六世紀頃のクチャ出土の舍利容器に描かれた楽人(図17)や、クチャ王国の美女(図18)にも、またキジールの壁画のトハラ⁽²¹⁾の騎士(図19)にも、同じような二本のリボンが肩の辺りにみることができ⁽²²⁾る。舍利容器の貴人のリボンについては頭髮を結んだものではないかとの見解がある。確かにクチャ王国の美女の場合など特に髪飾りのようにみえる。するとキジールの場合も、またバラルイックのテペの場合も髪飾りといえるだろうか。もしそうであるなら、これらにみられる男の頭髮は長く後に垂れており、そこにリボンを結んだということになる。しかしバラルイック・テペの場合、模写による写真資料ということを考慮しても、男の髪は短かくカットされ



図 18



図 17



図 16



図 21



図 20



図 19

ているように観察される。それは長く垂した婦人の髪との比較によってもそのように推察されるのである。またクチャの楽人の場合も肩辺りにカットされた髪の毛先が、耳に添って頬にカールしているとはみられないだろうか。もしバラリック・テペやクチャやキジールの男の髪が短く、このリボンが髪飾りではないとすれば、これは衣裳の飾りであろうか。それとまたにかの機能をも受けた装飾であろうか。

あるいはバラリック・テペのこのリボンはネックラインに沿った首飾りの両端のリボンが、項の辺りで翻っていることとみることとはできないであろうか。というのは、類推する対象としてあるいは妥当性を欠くとも思われるが、五・六世紀頃のアジャンタの第十七窟の飛天(図20)や婦人像にも似たような二本のリボンが項の辺りで上方に翻っているのを見ることができ、このリボンが首飾りの後から下っているものであることは同窟の後向きの男の首飾り(図21)の描写から察知できるのである。そして、アジャンタの壁画にみられるリボンが、ササン系のもので直ちにすることはできないにしても、第十七窟の仏堂前室左壁の非インド的な、否むしろイラン的ともいえる服装の諸国の王や軍隊とが描かれていることも考え合わせ、これは興味あることといえよう。

ともあれこれらの壁画にみられたリボンが、その機能はひとまずおくとしても、描かれたところが肩の辺りであるという点を重視したい。つまり肩の辺りにリボンを装飾するというササン系の一つの用法が、その祖型になったと思われる。またバラリック・テペのコート飾り(図7参照)をも含めて、ササン系の球体やリボン、つまりササン系の文物が中国菩薩像の円形肩飾りの祖型であると推定できる。

IV

次に中国における円形肩飾りの展開について考察してみたい。

まず山西省の雲岡石窟では第六洞方柱東面下層の本尊交脚菩薩像(図22)の肩に、彫刻された比較的小さな半円の飾りを見ることができ(23)。しかしこの像の衣文は補修がひどく、もとの姿は見られないといわれている。したがってこの肩飾りは、後代付加したものではないかとの推定も成り立つ。もしそうであるなら、雲岡石窟では肩飾りを有する菩薩像は見当たらないということになる。そこで河南省の竜門石窟をながめてみると、北魏(五〇〇年頃)の古陽洞や賓陽洞の菩薩像(図23)の肩に円とリボンとからなる円形肩飾りがみられ、また同じく河南省の鞏県石窟の菩薩像や北魏代の北響堂山の南洞・中洞・北洞の菩薩像にも付けられているが、鞏県では特にその作例が多い。更に甘粛省の麦積山石窟でも一、二の例を除いて同様の肩



図 22 飾りを北魏代の菩薩像(図24)が付けている。翻って敦煌石窟の場合を観察してみると、北魏代には竜門や鞏県にみられるような円形の肩飾りは殆んど見ることができず、布を結んで肩飾りにした作例がみられる(図25)。そして円とリボンとからなる耳飾りが北魏代の菩薩像(図8参照)にみることができ(24)のに、肩飾りは一・二の作例しか見られず、それも布を結んだ肩飾りである。隋代になって円形の肩飾りがみられるが、



図 23



図 24

首飾りや絡腋⁽²⁵⁾を肩で結んで肩飾りとした作例もあり、その方が大勢を占め、むしろ敦煌の肩飾りの特徴となっているように見受けられる。そして絡腋を結んで肩飾りにした作例はキジル(図26)にもみられるが、これはインドにみられる絡腋を結んで身莊嚴したことに関係があるろう。おそらくそういったインドの装飾法が西域辺りで肩で結ぶという装飾法に変わり、それが敦煌に伝わったと思われる。したがって敦煌の肩飾りにはササン系のものであるが、インド系のものも多分に含まれているとみることができる。ところで麦積山の塑像は殆んど密教関係のものはなく、中央アジアの塑

像の様式を反映したものともいわれているが、麦積山の肩飾りは大部分円形の肩飾りである。こういったことから敦煌の場合は特殊で、他の石窟の円形肩飾りはインド系のもというより、中央アジアを経たササン系のものであるとすることができよう。

ついで単独像の場合をみると、北魏・延昌二(五一三)年銘の金銅菩薩像(図27)が、円形肩飾りを付けており、これは初期の肩飾りの作例かと思われる。なおこの円形肩飾りの円はかなり大きく、したがって、この祖



図 25



図 26

型がササン系の球体とする仮定を裏付けるものとするとはできないだろうか。また円形肩飾りは石造の菩薩像にもみられ、たとえば北魏の半跏思惟像(図28)にも東魏の菩薩立像にも付けられている。更に肩飾りの円の部分がきれいに半円になっている作例が北齊の石造菩薩像にみられるのも面白い。なおこの円形肩飾りは河北・山西・甘肃・陝西・河南等広範な地域において盛行したものであることもわかる。

さて菩薩像の天衣には着装の変遷があつて、肩を露わにする



図 28

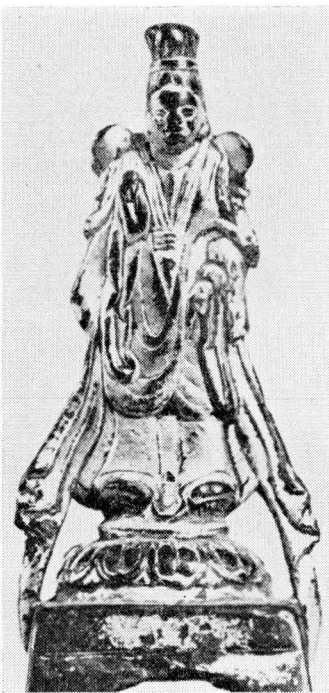


図 27

西方的な着装から、肩をすっぽりと被う中国独自のX字状天衣の着装にな
っていったが、このX字状天衣はその盛行の後、徐々に上半身を開放しつ
つある着装に移っていった。すると再び、装身具が台頭し、板状首飾りも
目立つようになる。そのようになるとこの円形肩飾りは天衣の上から、首
飾りと天衣との接点辺りに移る。⁽³³⁾更にそれは首飾りの上に移行し、一種の
首飾りの装飾物のようになるのである。⁽³⁴⁾(図29)。これら首飾りの装飾物とな
った円形肩飾りは、つぎには像莊嚴の中心的存在となった璎珞に吸収され、



図 31



図 30



図 29

璎珞の中の一メダル状の飾りと
なってしまうのである。⁽³⁵⁾北周の
金銅菩薩像や隋代の金銅菩薩像
(図30)がその例である。これは
また璎珞のつけ方の変化により、
一つとなる場合もある(図31)。
(挿図B参照)

肩の上に立体的に付加されて
いた円形肩飾りは、首飾りの上
では、なおその立体性は保たれ
ていたが、璎珞の上になると、
それは完全に失われ平面的な装
飾物となる。もはやここでは肩
飾りの残存形式とは認め難く、
単に幾重にも垂下される璎珞を
肩で留めるメダル状の留飾り、
あるいは装飾としか見られまい。
しかしこの装飾物はインド系璎
珞の中の一メダルとしての飾り
であると同時に、円形肩飾りの
変化したものとすることもでき
るのではなからうか。
つぎにこの円形肩飾りの盛行

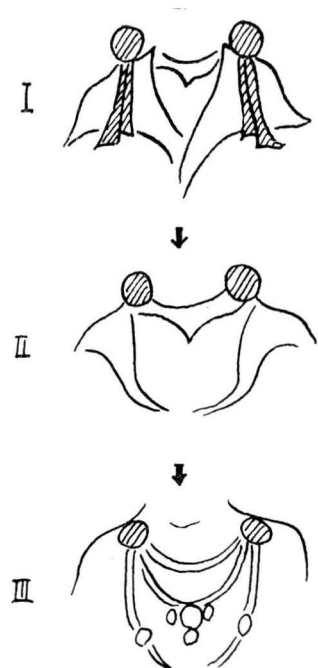


図 B

期間を考察してみると、現存の遺物からの推測では西暦五〇〇年前後から北斉・北周頃までとみられる。しかしこの肩飾りは北斉・北周頃にはまた首飾りの装飾物ともなり、隋代には瓔珞の一部として大部分吸収されてしまう。したがって肩飾りとしての盛行期間はおおよそ西暦五〇〇年前後からの五・六〇年間と推定される。

V

中国菩薩像の円形肩飾りが他に影響を与えたと思われるものに、朝鮮の百濟時代の金銅菩薩像(図32)や三国時代と推定される金銅菩薩像⁽³⁶⁾などがある。前者において、この肩飾りのリボンは肩から腕にかけて段状をなし、張りのある像容を形成する上で一つの役割を担っているとみなすことができる。なお本像は「その様式はおそらく南朝の影響をうけたものと考えられ、六世紀末葉の百濟仏の典型を示すもの⁽³⁷⁾」といわれているのも面白い。つぎに開元七(七一九)年銘、石造弥勒菩薩像(図33)(韓国国立博物館蔵)にも肩に飾りがみられ、これは半円の蓮華かと思われるものである。



図 32



図 33

同じく蓮華とみなされる肩飾りをつけた作例に、中国・北周の金銅菩薩立像(図34)がある。両者の肩飾りは類似しているが芸大の像の肩飾りの下にはリボン垂飾がみられるのに対し、開元銘の像にはみられない。またこの開元銘の像について「優美なつくりも南方的感覚を思わせ、下裳を両脚にまき上げた姿は中国の江北には全然見られない⁽³⁸⁾」といわれていることからして、この肩飾りは、あるいは江南様式の系統のものであろうか。そし



図 34

てまた江南地方の仏像には唐代頃まで、このような肩飾りが付けられていたであろうか。ともかく興味のある作例といえよう。

さて日本の菩薩像には、円形とリボンとからなる肩飾りは見当たらないが、火焰宝珠と思われる肩飾りの例はある。それは法隆寺藏釈迦三尊の両脇侍、四十八体仏中の半跏思惟像（図35）、法隆寺藏観音菩薩像の肩にみることができる。また釈迦三尊の両脇侍の火焰宝珠の下には、長いリボンもみられ、



図 35

日本では希有の作例といえる。なおこの火焰宝珠形の肩飾りは、中国の現存の作例にはみられないようであるが、前述の開元銘の蓮華の肩飾りのように、円形肩飾りとは別系統の一

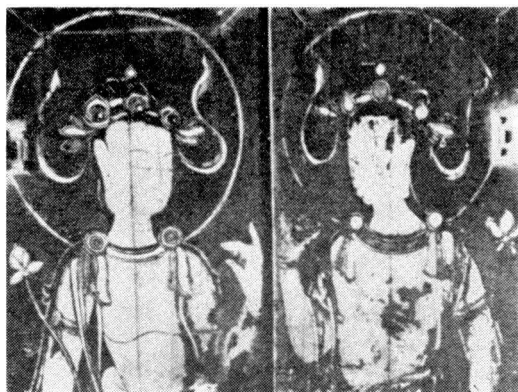


図 36

つのバリエーションとして、この種の火焰宝珠形の肩飾りもあったかもしれない。あるいは日本独自の、つまり和様化された肩飾りであろうか。ともあれ火焰宝珠の肩飾りは単に像莊嚴として用いられた円形肩飾りとは異なり、なにか仏教の光明といった意味を有するもののように思われる。



図 37

つぎに彫刻像ではないが、玉虫厨子屏絵の二菩薩は円形とリボンのついた首飾りを有している（図36）。これは中国にあつては円形肩飾りの肩から首飾りの上に移行した形態であつたが、ともかく日本においてはめづらしい作例であるといえることができる。なおここにみられるリボンは二色に色分けされており、敦煌の壁画（図37）や耳飾り、遠くバラライク・テペのコートのリボンとも共通し、玉虫厨子の絵画の源流等を考える上で、あるいは一つの手掛りともなりうるであろう。

VI

以上、中国菩薩像の円形肩飾りについて考察してきたが、この円形肩飾りは仏教芸術が漢俗化され、それが強められた時期に主として現われた、中国独自の菩薩像の服飾であるとみなすことのできるものである。

さて仏教芸術の中国化の問題を石窟寺院の場合で考えてみると、雲岡では第六洞辺りから徐々に中国化され、それを仮りに第一期とすると、それを継いだ竜門は第二期の中国化の時期とでも称すべきかと思われる。それは第一期の雲岡では、菩薩像の服飾を眺めてみると外来形の耳飾は取り去り、天衣は身体を被うようなX字状天衣のつけ方に変え、またその中心には古来から漢人に愛用されていた環を用いたりした。つまり第一期は中国の伝統的なものを投入した時期とみなされる。それに対して竜門様式の第二期では、第一期の様式を受け継ぎながらも、新たに外来の服飾であるササン系の肩の飾りやリボンや耳飾、また円環等を巧みに取り入れそれを中国化して、像を荘厳し、より厳肅な、中国的な像容に変えていった時期と推定される。つまりこのササン系の文物にその祖型をもつ円形肩飾りは、そうした仏教芸術の中国化を更に推進した時期に一つの役割を担った具体的な作例とみなすことのできるものである。

なお中国の菩薩像に円形の肩飾りを採用するに当っては、従来から中国にあった、衣裳の肩の辺りに布片を飾ったり、紋をつけるといった伝統が、微力ながら作用したと思われる。

つぎにこの円形肩飾りは中国において、肩の飾りから首飾りの上に移行し、更に瓔珞の中に埋没してしまうといった展開をみせた。

したがって円形肩飾りの盛行期間はおおよそ西暦五〇〇年前後からの五・六〇年間と推定される。そしてこの円形肩飾りは朝鮮には波及してみられるが、日本にはみることのできないものであり、その盛行期間等とも考え合わせ興味ある問題といえよう。

図 版 文 献

- 図 1 『金石策』
- 図 2・22 水野清一・長廣敏雄編『雲岡石窟』雲岡石窟刊行会、昭和二十六年
- 図 3 水野清一『アフガニスタン古代美術』日本経済新聞社、昭和三十九年
- 図 4 平凡社版『世界美術全集』中国Ⅱ、昭和二十四年
- 図 5 角川版『世界美術全集』朝鮮、昭和四十二年
- 図 6 小林太市郎『漢唐古俗と明器土偶』一条書房、昭和二十二年
- 図 7・16 Л. И. Албаум: Багатык-Теле. К истории материальной культуры и искусства Тохаристана Ташкент, 1960 (Л・И・アリバウム『バラライク・テペ』タシュケント、一九六〇年)
- 図 8・25 敦煌文物研究所編輯『敦煌采塑』人民美術出版社、一九六〇年
- 図 9・10・11・13・14 R. Ghirshman: Iran-Parthians and Sassanians, U. S. A. 1962
- 図 12・19・26 A. von Le Coq: Die Buddhistische Spätantike un Mittelasien, Berlin, 1924
- 図 15 Godard-Hackin: Les Antiquités Bouddhiques de Bāmiyān, Paris, 1928
- 図 17 『東京国立博物館図版目録・大谷探検隊将来品篇』東京国立博物館、昭和四十六年
- 図 18 A. von Le Coq: Bilderatlas zur Kunst und Kulturgeschichte Mittel-

Asiens, Berlin, 1925

- 図20・21 高田修・田枝幹広『アジャンタ』平凡社 昭和四十六年
図23 水野清一・長廣敏雄『竜門石窟の研究』座右宝刊行会 昭和十六年
図24 中華人民共和国社会文化事業管理局編『麦積山石窟』北京 一九五四年
図27・29・30・31・31・34 松原三郎『増訂中国仏教彫刻史研究』吉川弘文館 昭和四十一年

図28 O. Siren: Chinese Sculpture, London, 1925

図32 中吉功『新羅・高麗の仏像』二玄社 一九七一年

図33 松原三郎『新羅仏における唐様式の受容——二つの問題について——』『仏教芸術』83号 毎日新聞社 昭和四十七年) 挿図

図35 『御物金銅仏像』国立博物館 昭和二十三年

図36 平凡社版『世界美術全集』日本I 昭和二十四年

図37 敦煌文物研究所編『敦煌壁画』文物出版社 北京 一九五九年

註

- (1) 拙稿「菩薩像のX字状天衣とその中心飾としての環について」(『美術史研究』第七冊 早稲田大学美術史学会 一九六九年)
拙稿「中国菩薩像の耳飾りについて」(『文化生活』16 東京文化短期大学 一九七二年)
(2) 平凡社版『世界美術全集』中国I グラビア版125
(3) 註(1) 挿図124、三角縁の仏獣鏡 白銅 奈良県南葛城郡馬見村新山古墳出土
(4) 註(2) グラビア版7 三国両晋階段式の神獣鏡 白銅 なお、ここにみられる神仙の羽毛のようなものについて同解説で長廣敏雄氏は襞をなした翼の

ようなものと推定しておられる。また、仏獣鏡のそれを水野清一氏は羽毛としておられ、(註(2) 本文「仏教彫刻」 五七頁) それらをも考慮して、ここではみな羽毛としておきたい。

(5) 水野清一・長廣敏雄編『雲岡石窟』第七巻図版解説63 なお、肩光との解説は十九洞から五・六洞辺りまで散見するが、これは単に火焰光背の中の、一火焰裝飾とみなすこともできるのではなからうか。

(6) 熊谷宣夫「西域の美術」(『西域文化研究』第五 法蔵館 一九六二年) 七六頁

(7) 註(6) 九一頁。熊谷宣夫「コオタン将来の全銅仏頭」(『美術研究』第二百号 美術研究所 昭和三十三年) 一五頁

(8) 例えば北魏の菩薩像(松原三郎『中国仏教彫刻史研究』図85C)に何か不明であるが肩に紋風のものがみられる。帝王図巻のそれと形態の類似から、この菩薩像の、この円紋風の飾りが、もし皇帝の肩飾の円紋を模したものと仮定すれば、他の多くの菩薩像が付けている円形育飾りは、肩の上に出ている飾りであり、なおさら皇帝の円紋が菩薩像の肩飾りの祖とすることは出来ないであらう。

(9) これを「背に神獣鏡の神像等によくみるひれ状のもの」といわれたのもある(岡崎敬「アスタアナ古墳群の研究——スタイン探検隊の調査を中心として——」(『仏教芸術』19号 毎日新聞社 昭和二十八年) 五二頁

(10) この領巾は「領巾(主として巾の狭い頸巻を指す)の一種で、行歩につれて飛揚する。またそれが領の後に縫付けられたことは泥像や画像によってもわかるが領巾のそういう着け方は恐らく晋代以後に行われたといえる」(小林太市郎『漢唐古俗と明器土偶』一条書房 昭和二十二年) 三五九頁(三六一頁 註(1))

(12) 林良一「サーサーン朝王冠宝飾の意義と東伝」(『美術史』28号 美術史学会 昭和三十三年)

(13) ル・コックのいうこの作例が、どれを指しているのかは不明であるが、唐代の武将などの肩飾りは私の知る限りでは焰の束というより、むしろ獣の頭髪とみなされるような作例の方が多いように思われる。

(14) A. von Le Coq: Die Buddhistische Spätantike un Mitelasien, Berlin 1924 S. 77

(15) これを「交差する首飾りの、その両肩が動かないようにするために付けられたかと思われるような花の蕾のような形をした突起した大きなもの」(M Paul-David, M. Hallade et L. Hambes: Mission Paul Pelliot II TOUTMCHOUQ, Paris 1964 p. 232) とした解説もある。

(16) 平凡社版『世界美術全集』古代西アジア 図26

(17) J. Marshall & A. Foucher: The Monuments of Sanchi, Calcutta, 1940 vol. Two Pl. XXVII.

A. Cunningham: Stupa of Bharhut, India, 1962 Pl. XXIII.

しかしインドにおいて、このX字状璣珞は比較的少なく、西域、特にシオルチュクの泥像には多数見受けられる。このシオルチュクの泥像の顔はガンダーラ彫像の系統とされているが(羽田亨『西域文明史概論』仏教美術二、七六頁)、ガンダーラにはこのX字状璣珞はほとんど見当らず、興味ある問題かと思われる。

(18) 註(1)

(19) Godard-Hackin; Les Antiquités Boudhiques de Bāmīyān, Paris 1928

吉川逸治「バーミヤーンの芸術」(『中国及び西域の美術』美術研究叢書

白鳳書院 昭和二十三年)

(20) Godard-Hackin; *ibid.* Pl. XXIII a-3, b-4 Godard-Hackin; *ibid.* p. 23

(21) 熊谷宣夫「クチャ将来の彩画舍利容器」(『美術研究』第百九十一号 美術研究所 昭和三十三年) 十一頁

(22) 第十七窟・仏堂前室左壁 三道宝階降下部分(2)(高田修・田枝幹広『アジャンタ』平凡社 昭和四十六年) 図版37

(23) 『雲岡石窟』第三卷・図版解説143

(24) 円形肩飾りの円の部分が花になっている例がある(文化部社会文化事業管理局編印『麦積山石窟』北京 一九五四年) 図版一一八。

(25) 「梵名 Yajnopavita 漢に訳して神線、神索、淨繩または持供とし、また絡腋とも言う。吠陀の学習を終了したものに授与されるもので、最も高い階級を示す神聖な紐で神線と称される所以である。……神線を着用するは元来印度教の風習であるが、仏教尊においてもこれに倣い着用する像がある。……絡腋の結び方を見るに……両端を前面に結ぶ式もある」(逸見梅栄『仏像の形式』東出版 昭和四十五年) 本論第七 身莊嚴 四二二頁～四二四頁。

(26) ササン朝の球体がイメージとしてこういう装飾法を生み出したとはいえないだろうか。

(27) 和辻哲郎「麦積山塑像の示唆するもの」(名取洋之助『麦積山石窟』岩波書店 一九五七年) 五頁

(28) 松原三郎『増訂中国仏教彫刻史研究』(吉川弘文館 昭和四十一年)の図版に依る。

(29) 註(28)図版86・89・105・111・124

(30) 註(28)図版111

(31) 註(28)図版135・136・144・156

(32) 註(1)

(33) 註(26)図版153・164・215(a)・220(c)

(34) この首飾りの上の円い装飾物は石窟寺院の菩薩像にもみられたが、単独像でも石造菩薩像が殆んどである(註28)。

(35) 単独像によると、この瓔珞の上の飾りは金銅菩薩像が大勢を占めている(註28)。

(36) 金載元「宿水寺址出土の仏像について」(『美術研究』第二百号 昭和三十二年)挿図6

(37) 中吉功『新羅・高麗の仏像』(二玄社・一九七一年)二十二頁。

(38) 松原三郎「新羅仏における唐様式の受容——二つの問題について——」

(『仏教芸術』83号 毎日新聞社 昭和四十七年)四二頁。

(39) これを「宝珠より短い帛を垂れて装飾としている」といわれたものもある

(逸見梅栄『仏像の形式』本論第六 身莊嚴 三五五頁〜三五六頁。

文型練習におけるチャートの使用法

田 島 富 美 江

序

外国語学習における文型練習には、Lado の提唱する “Completely Oral” と Buell の絵を利用するものとの2つの方法があることは言うまでもない。特に後者の“絵”の役割りを果たすものとして、今日では写真や略画のような静画のみならず、実物、模型等もしばしば利用されている。すなわち、聴覚刺激だけでなく、視覚刺激を呈示して、文型練習を効果的にしようとする方法である。

これらの方法は何れもそれぞれ長所・短所があり、どちらが優れた方法であるかを述べることは不可能、でこの点に関しては、実際に指導に当る教師がその都度最適な方法を選択する必要がある。

本稿は視覚刺激の1つであるチャートを文型練習に使用する際に、一般に長所とみなされているもののうち、(1) スピーディな練習が可能で、時間の無駄が省ける。(2) 絵による場面構成が可能であること。(3) 同じチャートを何度も使用することが出来る。という3つの点を総合的に考察し、より効果的な呈示方法を見出すことを主要目的とする。

チャートには、(a) 1枚の紙に1つの絵を描いて文法事項の導入や展開等に使用するものと、(b) 1枚の紙に数個あるいは十数個の絵を組み入れたものを使用するものがあるが、本稿では(b)のみに関するものに限定する。

I 文型練習の速度と視線の動き

チャートに使用し得る絵の種類は数多くあげられるが、ミシガン大学英語研究所で出されたものを参考にしてその主なものをあげると次のように分類できる。

- 1 物体を表わしたもの (i 物体1個, ii 物体2個以上, iii 大きさ、長さの異なる同じ物体を描いたもの)
- 2 人間の状態 (例えば sleepy, busy 等) を表わしたもの
- 3 人間の行動 (例えば to study, to watch 等) を表わしたもの
- 4 2つ以上の要素 (例えば時計と人間の行動、動物と物体、等) を組み合わせたもの

教室の中で、拡大したチャートを学習者の前に呈示して文型練習を行なう場合、練習の速度と学習者の視線と、注意力の集中度は学習結果に大きな影響を及ぼすものと思われる。このこ

とは上にあげたいかなる種類の絵を使用した場合にもみとめられることである。先づ文型練習に入る前に、重点をおくべき文法項目を十分に理解させておくことは、何を使用する文型練習にも必要条件であるが、教師の側でその作業を終えた後、チャートを使ってスピードのある文型練習に入った場合、学習者の視線は、問題の絵に関する発話をしている間に、すでに次の絵に移っていることがしばしば観察される。すなわち発話が、視線を向けている絵と一致していない、ということである。勿論この場合、教師は棒のようなものを使って、問題の絵、あるいは絵の中の重要な点を指してはいるが、それも学習者の注意を問題の絵に集中させておくには大した役割りを果たしていないのである。

一般に一枚の絵を見る場合にも視線は常に絵の中心点に留まっているわけではなく、最も興味をひくところを中心に複雑な動きをするものである。したがって、絵の書き方について“絵は、重要でない部分はすべて省略し、教師が見せようとする目的のもの以外は学習者が見ようと思っても見えないようにするのが望ましい。”と吉沢氏⁽¹⁾も指摘している。このことから考えても、チャートは同程度の重要性を表わした絵が次々と並べられているために、速度を落した練習においても1番目の絵を見た時、その絵に余程引きつける要素がない限り視線が2番目、3番目の絵に動くのは、よくうなずけることである。学習者の側には、スピードのある練習で間違いを少なくしようとする構えが出来ていることもたしかに認められることであり、それが以上の如き視線の動きと影響し合っていることから推察して、問題の絵に基づいた発話をする時に、視線も注意力も共に次の発話の準備をしているとすれば、その発話に対する脳の覚醒状態は、かなり弱くなっていると思われる。すなわち、正しい発話はなされていても、ことばとしての意味を伴っているかどうかは疑がわしい。

このような練習に終始するならば、それがいかにスムーズに行なわれようとも、文型練習は単なる口ならしに過ぎず、機械的であり、その場限りのものであるという批判は免かれないうし、又、習慣形成という文型練習本来の目的にも沿うものではないであろう。習慣とは無意識的な練習の積み重ねのみで形成されるものではなく、そのことは D. H. Harding が、Belyayev の skill と habit についての定義を引用して、次のようにのべていることからもうなづける。

“Skill is the term given to an action accomplished by a person for the first time and with understanding. But this is a very different thing from speech habits, because by habit is understood an action carried out by a person without participation of consciousness, i. e. automatically owing to the fact that he has frequently carried out this action in the past.”the exercise of skills, those actions that are performed with the participation of consciousness, is necessary for developing habits.⁽²⁾

以上のことから、言語学習の場合、ことばとしての意味が意識的に理解されていない文型練習からは言語習慣は形成されないということが出来よう。したがって当然の事であるが、発話の際視線が先に進むことを可能な限り防ぎ、常に問題の絵に関する発話がなされるような方法を講じなければならない。それには絵の表わす意味を理解する段階まではチャートを使用し、その後は個々の絵をばらばらにして、1枚の絵以外は目に入らぬよう picture cards 式の使用

法をとることが望ましいし、また速度に関しても、学習者の視線を教師はよく観察し、口先だけの発話に終わっていないかどうかをよく確かめ、適当に調節することが望ましい。

文型練習が単なる口ならし程度のものでよいなら、テープのあと、又は教師のあとについて何度もくり返させる程度で充分であり、時間と労力を使って視覚的補助教具を使用する理由はまったく見出せない。

II “絵による場面構成”に関する問題点

a. “場面”と“ことばの意味”

Situational Teaching ということばは人によりさまざまな定義がなされているが、基本的には“教室や教室内の人や物を、教える言語の場面として使用すること”である。但しこのような限られた場所や物で言語学習が可能なのは、我が国の中学でも学習開始後きわめて僅かな期間だけである。The New Junior Crown English Course 1 を例にとっても、無理をして教室内に持ち込める実物 (tennis rackets, photo albums 等) を使用して situational teaching ができるのは第4課までで、第5課では baseball が入り、第6課では to play the piano, to watch television 等、簡単に教室内で構成不可能な行為・動作・場面が取り入れられている。したがって教室内に持ち込めないもの、或いは実現できない場面等を、絵・模型その他の視覚的教具を使用して、仮の situation を設定し言語学習を進めていくやり方をも当然 situational teaching の中に含めることができる。このような situational teaching の定義によれば、I でのべた絵の種類ほとんど全部を situational teaching に使用することは可能である。

ことばとは、それが単語であっても、フレーズであっても、或いは1つの文章であっても、それ自体場面から遊離している場合には意味を伴うものではなく、それが場面の中で用いられた時はじめて意味を有するようになるのである。このことから理解出来るように、例えば English Pattern Practices: Chart III の人の行為を表わすものや Chart IV の時計と人の行為とを組み合せた絵などは、簡単に教室内で構成できない場面を次々と並べているために、学習者はその絵を直接の場面に近い感じで経験することができ、その場面の一員として、意味を理解した状態で発話ができるわけである。このことは視聴覚教育の視覚教具に関する論理にも当てはまり、一般的にも認められることであって picture cards と同様、visual aids の長所をうまく利用したやり方といえよう。しかも1個の絵は、描き方により多くの事柄を表現することが可能であるため、1枚のチャートは更に機能的で多くの文型に利用できるし、事実 English Pattern Practices: Chart III は約 135 回、Chart IV は約 45 回も使用している。

このように場面構成が可能であるため、この種のチャートを使用した文型練習においては全部口頭による方法に比較して、学習者は意味を伴った発話をしているかの如く感じられるために長所の1つとして掲げられているわけであろう。但し以下にのべる b, c 等の条件により、絵による場面構成と発話の意味には大きな疑問が生じてくる。

b. 視知覚の過程と situational meaning の理解

日常我々が新しい場面に入る場合は、諸々の感覚の総合的な働きによってその場면을知覚するのであるが、そのうちもっとも重要な役割りを果すのは視覚の働きであろう。しかし視覚を通して環境の中のいろいろな対象を知覚するには、非常に複雑な過程が存在するのである。ガードナー・マーフィは、その過程に3つの段階があることを述べている。

1 散漫の段階

これは視野がまだ分節化せず、対象がぼんやりと見える段階。

2 分化の段階

視野の各要素が分離しはじめ、視覚者によって認められるようになるが、その各要素間の関連は無く、非統一的な段階。

3 統合の段階

これは前に分節化されたさまざまな要素が一つの統合的な型に合成される段階。この統合の段階では、対象の不用なものは減少し（又は無くなり）、簡潔・単純となるが、はじめて意味内容を人に伝達できる段階⁽³⁾である。

我々はこの3つの段階を経て situation を理解すると、それが我々に対する刺激となり、次に我々は言語的又は非言語的な種々のコミュニケーション形式によって反応する。ここにおける反応は場面の状況を理解した上での反応であって明らかに意味を伴ったものであり、我々の日常のコミュニケーションは、この過程の連続であることは言うまでもない。チャートの絵を理解するのも、まったくこれと同じ過程を踏んで行なわれるものと理解する。

c. チャートによる場面構成と実際

チャートの各々の絵に1つの situation としての機能を持たせるならば、教師はチャートを使用する都度、学習者が散漫一分化一統合の段階を通して発話できるようにすることが大切である。すなわち見た絵の意味を理解し、その situation の中で発話できるような方法で絵を呈示し、また situation の中で発話できるような絵を使用することである。それには次のことを考慮すればたやすく理解できると思う。例えば、English Pattern Practices の Chart VII の絵は、実際には約46回使用する目的であるが、学習者にとっては最初の“絵を意識して解釈する段階”においては situation としての機能を充分果すものであるが、その段階は数回で終り、その後は学習者に対して situation としての働きはなくなり、単なる記号 (sign) にすぎないものになってしまう。

Sign は勿論交通標識のように或る意味を伝達するが、その“意味”とは言語学習での situational meaning とは異なるものである。絵をみて散漫一分化一統合の段階に至らしめ、situational meaning を理解させる前提条件として“先づ対象を正確に見ること。それには視線をそれに向けること。そしてその対象は目の中のどこに落ちてもしよいというわけではなく、眼底の中央の最も精巧に出来ている場所、すなわち中心窩に落ちるこ。”⁽⁴⁾が必要である。したがっ

て見馴れた絵は注視しなくても、絵の特徴と、それに対応する外国語との連合が出来てしまえば、それ以後はその絵を特に situation として理解しなくとも、文型練習として正しい発話をする事ができる。すなわち situation を理解する過程を経なくとも文型練習は無事に終るのであって、絵は呈示されるが学習者の側では situation と無関係で、無意味なことばの遊びを押しつけられることになり、機械的で単調となり、その肉体的・心理的な負担は大きいといえるし、さらに無意味なことばの学習は記憶保持と般化にもマイナスの影響を及ぼすことになる。したがって絵とそれに対する外国語との連合が成立した後では視知覚の過程を必要としないから、to walk に対しては歩いている絵、又 to work に対しては働いている絵を呈示することは“situational”という意味では全く無駄なことといえよう。

更に悪いことに、その連合の度合いが強くなると、その絵と同じ場面での反応はできるが、他の類似した場面では応用出来なくなるという事態も起り situational teaching の目標とは正反対の結果となる恐れがある。例えば English Pattern Practices の Chart II の 7 や 11

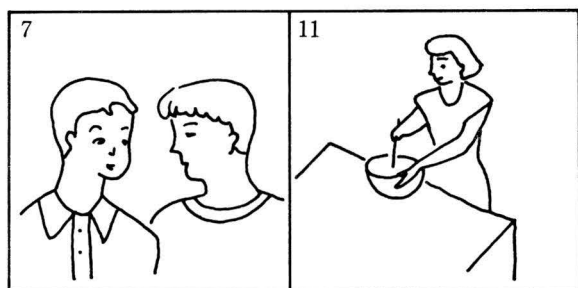


図 1

(図 1)などは、その絵からどうしても happy とか busy という形容詞が浮んで来ない。このチャートの問題は happy, busy 等を教えることではなく、usually, always, never, sometimes 等の副詞の位置に関する練習であるが、学習する側にとっては最初からそれらの形容詞を明確に表わしていない絵を

呈示されて、無理に happy, busy の連合を作るわけであるから、現実には happy, busy を表現する場面に入った場合に、果してそのような形容詞を produce できるかどうかは疑問である。このように考えて来ると、チャートの呈示方法より以前の“形容詞の視覚化”というむづかしい根本問題に戻る必要性も感じられる。

d. チャートによる場面構成を有効にする方法

先ごろ出された幾つかの書物には、同じチャートを何回も使用することにより語いの負担を感じないで、物体や事物を外国語で表わすことができること、又同じチャートが他の課で用いられる時は学習者は既習の問題の復習をすることにもなる、等とミシガン大学の方針をそのまま踏襲した意見もみられるが、やはり上に述べたような欠陥は免れないであろう。これらの欠陥を是正する方法としては、先づ絵に関しては、いつも同じ絵を使用することはできる限り避け、その都度新しい絵を使用することが理想的である。これは、周囲の場面を手当たり次第視覚化して使用せよということではない。やはり語いはある程度限られた範囲内のものを使用し、絵にも統一がとれていなくては学習に混乱が起ることは間違いない。筆者の意見では、例えば to play the piano, to paint a picture 等の動作を表わす絵においては、常に女子がピアノを弾いている絵(図 2)とか、部屋の中で絵(図 3)を画いている絵のみを使用せず、前



図 2

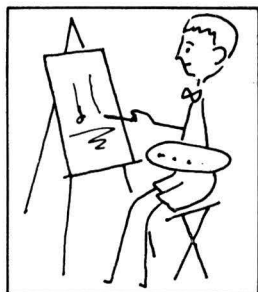


図 3

者にはその他音楽会でピアノを独奏している絵、又はオーケストラの前で弾いている絵、又二人で連弾している絵等を用意し、そして後者には戸外で写生している絵、大勢で一つのものを見ながら画いている絵等々を使用することが望ましいということである。絵の画き方に関して注意すべきこととして、使用する絵の種類や色を統一することは勿論であるが。数多い種々の絵を使用する場合、教師が1個1個その絵のよみ方を説明したり、教えたりしなくても、その絵を見て学習者自身の判断で to play the piano, to paint a picture を含んだ発話が出来よう重要な部分が特に目立つような絵を準備することが望ましい。すなわち教師としては、学習者が自分の力で絵の situational meaning を理解する過程を踏む機会を与えてやることが大切である。

このように常に外国語の表現の統一はとれているが、場面の違った絵を呈示すれば、学習者はその絵を注視し、散漫一分化一統合の過程を辿り、各発話が比較的有意義になると思われる。又、チャート形式はIで指摘したように、目を1つの絵に集中させることは困難であるため、意味を伴った発話という点からも各絵は次第にばらばらにして picture cards のように使用し、しかも順番はその都度変えるのが望ましい。

III 物体を表わすチャート

物体を表わすチャートには前述のように3種類に分けられる。(1) 1コマに1個の物体をかいたもの。(2) 1コマに同じ物体を2個以上かいたもの。(3) 大きさ長さの異なる物体をかいたもの。これらの(2)と(3)の場合は、例えば数の問題や比較の練習などをする場合に、口頭の説明や口頭のみによる練習よりも、絵を使用すれば学習者は理解し易く、学習もスムーズに進められるので利用価値はかなり高いといえよう、但し(1)と(2)を使用する場合には次のような方法が望ましい。すなわち、1つの文でその物体だけが置換の対象となっているような場合(例えばカメラやタイプライターを並べたチャートを使用して They have their cameras. They have their typewriters. のように下線部を別の語に置換する場合)には、絵と物体の名称とが強く連合されたあとは、全部口頭でやるのがよいと思われる。その理由としては、連合が成立したあと、いつまでも絵の刺激を与えられていると、同じ物であっても単に聴覚刺激を与えられた時に、自分の力でイメージを作る作業が出来にくいのである。これは単に物体を表わすチャートに限らず、簡単な動作を表わしたチャートで文型練習する場合にも当てはまることである。すなわち言語学習においては、ことばの刺激によりその物体或いは一定の場面のイメージを作る訓練も必要なことである。但し1つの文で2つの要素の置換などを行なう場合、口頭で可能なものは極力口頭によるのが良いが、2つの刺激を同時にことばで与えることは困

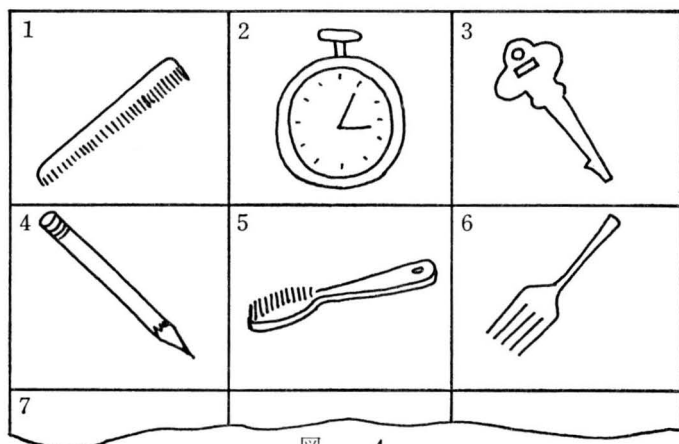


図 4

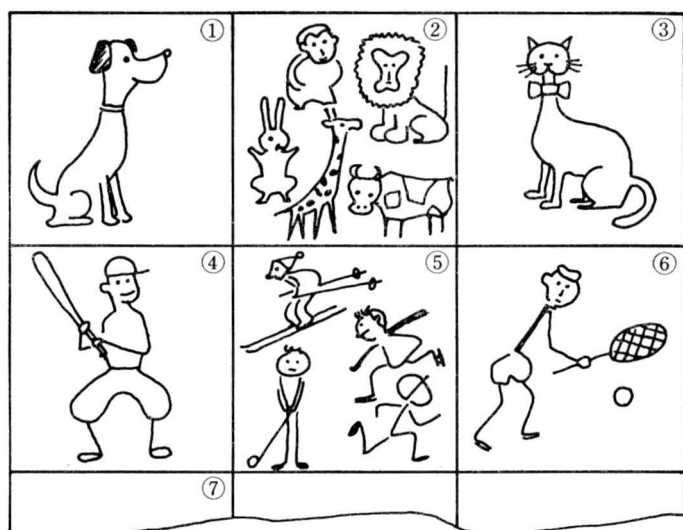


図 5

難であり、又難解であるので、そのような場合には無理をせずにチャートを使用することは有効である。

English Pattern Practices の p. 73 では Chart I (図 4) を使って He has his comb. He has his watch. と絵の刺激によって下線部を置換する単純な練習を要求している。又 The New Junior Crown English Course 1 では Chart 3 (図 5) はすでに第7課で使用するように構成されているので、その絵については充分理解出来ていて、一年の終り頃には口頭による刺激だけで充分意味を伴った文型練習が出来ると思われるのに、第 29 課では同じチャートを使用して練習する様になっている。この方法は確かにスピーディーであり、“限られた語いの範囲内で……”というミシガン大学の方針は理解出来るが、簡単な動作や使用頻度の高い名詞・動詞を表わす絵なども、出来るだけ早い時期に口頭刺激に変えることが望ましい。又学習者が確実に知っていると思われる語も多くとり入れて沢山の刺激を与えることも大切なことであ

る。

結 び

文型練習が英語学習のすべてでないことは言うまでもないことであり、授業中で文型練習に当てる時間も 10 分程度が適当であるとされている。その間にも口頭をはじめ種々の視覚教具（例えば wall pictures, models 等）を使用することもあるので、チャートはごく限られた僅かな時間しか使用されないことになるが、本稿では一般にみとめられている長所を最検討し、より有効な使用法を探ってみた。

英語学習の中で視覚教具を使用することは比較的簡単でしかも効果的であると単純に考えられている風潮があるが、実は非常に困難であり、使用法によっては全く無効になる事もあり得る。しかも準備という時間的問題のみならず学習者の心理状態等が複雑に絡み合うものであることをよく認識し、不必要な視覚教具の使用を、出来る限り回避する研究も、大いになされるべきである。

注 (1) 田崎清忠編：「英語科視聴覚教育ハンドブック」大修館，1968，p. 235

(2) D.H. Harding: "The New Pattern of Language Teaching", Longman, 1970, p. 64

(3) 宇野善康訳著：「視覚コミュニケーション」，正栄社，1965，pp. 101～103

(4) 盛永四郎訳：「視覚の法則」，岩波書店，1968，p. 88

参考文献

Buell, M.G.: "Picture Exercises for Oral Drill of Structure Patterns", Selected Articles from Language Learning.

Corder, S.P.: "The Visual Element in Language Teaching". Longman, 1966.

Dale, E.: "Audio-Visual Methods in Teaching", Holt, 1961.

羽鳥博愛編：講座・英語教授法 第 11 巻 視聴覚教具の活用，研究社，1970

伊藤健三編：講座・英語教授法 第 8 巻 文法文型の指導，研究社，1970

Lado, R.: "Pattern Practice—Completely Oral", Selected Articles from Language Learning.

Lado, R. & Fries, C.C.: "English Pattern Practices", Univ. of Michigan Press, 1958

三省堂：The New Junior Crown English Course I, 昭 46.

田島富美江：文型練習における問題点，東京立正女子短期大学 論叢第 2 号，1968

山家保：新しい英語教育，ELEC, 1968

山家保：Pattern Practice と Contrast，開隆堂，昭 43

吉沢美穂：絵を使った文型練習，大修館，1965

On “The Navy” by Toyoo Iwata

Kumiko Kondo

Japan Times and Advertiser reported as follows on March 7, 1942: Nine War Heroes Revealed: meet Gallant Death aboard Special Attack Flotilla at Hawaii.

Announcement By Navy Ministry

3 p. m. March 6, 1942

The outstanding achievements attained by the Special Attack Flotilla of special submarines in the sea battle in Hawaii on December 8, 1941, have been honored in a citation by the Commander-in-chief of the combined Fleet, which the Navy Minister has submitted to His Imperial Majesty, the Emperor.

The citation dated February 11, 1942, reads:

“At the start of the war on December 8, 1941, the Special Attack Flotilla, in concert with the Naval Air Force, struck the main body of the American Pacific Fleet in the Hawaiian Naval base as the spearhead of the Japanese Naval Force and attained splendid achievements. The outstanding military service of the Special Attack Flotilla is hereby specially mentioned, having enhanced as it did both at home and abroad the reputation of the loyalty of the members of the Imperial Navy, as well as the morale of the entire service.”

Admiral Isoroku Yamamoto

Commander-in-chief of the Combined Fleet

“Five vessels of the Japanese Special Attack Flotilla have not returned yet.” These words were contained in the last paragraph of the famous Imperial Headquarters announcement on the Battle of Hawaii.....

The tradition of the Japanese Navy Officers and men engaged in submarine warfare has been handed down from the late Lieutenant Tsutomu Sakuma, who during the initial period of Submarine technique nearly 40 years ago, shared the fate of a submarine in the Inland Sea of Seto. The great results of the Battle of Hawaii were brought to a more brilliant relief by the exploits of the Special Attack Flotilla. A new history of Greater East Asia thus has been unfolded by these nine war gods.....

“The Special Attack Flotilla set out on a certain day of a certain month on its glorious expedition. It sped its way toward Pearl Harbor, and passing through the enemy’s Vigilant guardlines and complicated channels, all vessels of the Flotilla penetrated into the harbor, each taking its pre-assigned position. They attacked the enemy in broad daylight or made a surprise attack, by night, carrying out precedent in history; and after performing their duties the crews shared the fate with their vessels.

In particular, the instantaneous sinking of a battleship of the Arizona class as the result of a night assault by the Special Attack Flotilla was clearly observed by the Japanese Naval Force far away from the Hawaiian Naval base.

At 4:31 p. m., December 8 (9:01 p. m. of December 7, Hawaii time), just two minutes

after the moon-rise, a tremendous explosion occurred in Pearl Harbor, sending fiery columns high up into the air together with the scattering red hot iron splinters, in a few minutes, the fiery columns disappeared whereupon the enemy anti-aircraft batteries went into action, apparently mistaking the raid of the Special attack Flotilla for that of Japanese Aerial Force. At 6:10 p.m., the same day (10:41 p.m., Hawaii time), a wireless message from one of the Special attack Flotilla was received, announcing its successful mission.

The vessels of S. A. F. are regarded as having either blown themselves up or having been sunk by the enemy after 7:14 p.m., the same day, when the wireless communication from the Flotilla ceased.....

The Flotilla was instructed to join the fleet following the conclusion of its attack, but no vessel of the Flotilla returned..... We cannot but conclude that the Flotilla attacked the enemy warships at an unprecedentedly close range, against the rain of bombs and air-torpedoes dropped by the Japanese Air Force, or remained submerged during the daytime and came up to the surface with the moon-rise to concentrate attacks on those enemy capital ships which they confirmed had suffered comparatively little damage from the daytime attacks. All the crews meanwhile were entirely devoted to attaining with the idea of rejoining the fleet being entirely left out of their consideration, as they were above the question of life or death.....”

A. A Baby Is Born

In the Hall of Mirrors at Versailles on June 28, 1919, a treaty of peace was signed between the Allies and Germany. The news was received in Paris with shouts, tears and confetti. But the Parisians were overjoyed, not at their victory, but at the coming of peace.

While the din from the joyous celebration was still vaguely audible, a little baby boy was born to Mr. and Mrs. Shinkichi Tani, a rice dealer of Shimoarata-machi, Kagoshima City, on November 18 of the same year. Father Shinkichi, 49 years of age, was busily occupied with winnowing at the back of his shop which faced the Taniyama Highway when the loud, healthy cry of the baby reached his ears.

“A boy.” He said to himself.

Mr. Tani, unlike many merchants, was very reticent. His inborn taciturnity which was tempered by participation in the Imperial Guards Cavalry of which he had been a superior private and in the Sino-Japanese and Russo-Japanese Wars was characteristically shown on this occasion when he failed to evince any surprise whatever at the birth of a new-born baby and a boy at that birth.

The new-born boy was the eleventh comer in the Tani family of five girls and five boys who had been reared into fine, sturdy men and women. The birth of another child was thus no occasion for excitement.

As was the local custom, large families were common and nothing to make a fuss about. Children were regarded as gifts from heaven. Thus, although the Tani family was not financially well off, the eventful appearance of another baby was welcomed for in the province of Satsuma, males were classed above females.

“What shall I name the boy?” pondered Shinkichi. It was quite easy to name a

girl—their first had been named Haru, the second Mitsu—but the naming of a boy required some cogitation. The first two sons, Shinzo and Shinjiro, had not provided any trouble but as the children appeared in succession, the problem became difficult. The fourth son has been named Yonokichi which had no meaning at all but it being the 4th son, while the most prosaic name of Taro was given to the fifth son. He named his children in a way that defied all convention. To an extent, it was ridiculous. But this time, Shinkichi was determined that his eleventh child should have a fitting name. There was no particular reason for this decision but he felt called upon to find at least a decent name for this child.

“I want him to share my name,” he thought. “Shin could be read also as ma. Ah, yes, Masato—a man of truth. There’s a name.”

It was a beautiful name. Masato Tani! A name which may have been owned by one of the eighty three loyal retainers of Satsuma. A name that carried with it a certain amount of dignity. And yet his family was such a common one.

About seven days after the birth of Masato, Waka was already giving instructions and directions to the entire household from her bed. The eleventh child birth had not sapped her strength, although one might imagine that a woman who had given birth to so many children must be robust. On the contrary, she was small and slender. She had a fair complexion and thick black hair, like all Satsuma women. Yet she could not be called beautiful as her cheek bones were high, her lips thick. Her slanted eyes and gentle voice were the only signs of loveliness in her. Being a tradesman’s wife, selling tobacco, kitchenware and shochu (wine made from potatoes), besides rice, her manners very humble. Being a daughter of a plebian, she was not a woman of high intellect. She was never given to arguments or never did she aggressively assert herself. She was a typical woman of Satsuma who asked for nothing in life but work, faith and the bringing up her children.

“Haru, the noon whistle will soon blow.” She called to her eldest daughter from her bed.

Haru, seventeen years of age, was a great help to Waka, quiet and reticent like her father. While her mother was in bed, she had taken over the management of the kitchen. Shinzo, the eldest son, was not much of a help around the house but fourteen year old Mitsu, the second daughter, and thirteen year old Shinjiro, the second son, were willing to do their share in housekeeping such as sweeping and delivering goods to customers. The only child needing the mother’s attention was two year old Taro. But the house was kept in neat order despite the large family requiring Waka’s attention. In fact, Waka had never hired any help while she was in bed.

“Haru, did you deliver the shochu to Kajikya?” Waka asked.

“Yes, Mother, two quarts.”

Haru could always be relied upon to do her work. It was therefore with a feeling of peace that Waka stayed in her bed, patiently waiting for the day when she could get up.

The construction of the Tani house was much like that of a farmer’s. There was a large earthen floor but the number of rooms in proportion to it was small. Besides the room where Waka was recuperating, there were three other rooms and one small room

which was used as the children's study. At night these rooms were occupied by the thirteen members of the family.

Masato grew up healthy and strong, giving no unnecessary worry to his parents. Unlike Yonokichi, who was very gentle but sometimes caused anxiety to his mother by having stomach troubles, Masato, though not so robust, did not suffer from internal ailments. When hungry, he would cry furiously; but when his appetite was satisfied, he would soon fall asleep. Sometimes, he would awake from his sleep, without a cry, and play with his own little hands. He began to laugh and smile before his first birthday arrived.

Masato's fair complexion, and slanted eyes were (inherited) from his mother, and his red, gently closed lips from his father. He was so sweet and cute that anyone who saw him could not help but smile. He smiled even at strangers. Those who saw his winsome smile often mistook him for a baby girl.

"What a lovely smile this baby has. She will become an amiable bride," the people would say as Mitsu carried him on her back.

Wake had her twelfth child, Masahiko, when Masato was three years old, and she was very busy, of course, but she had no intention to omit the celebration of Shichigosan (celebrations held for children of three, five and seven years of age) for her children. For children, these ages are believed to be unlucky. Therefore, in order that their children of these ages may not be overtaken by any serious injuries or misfortunes, the parents, with their sons or daughters, pay homage to village shrines.

Waka took Masato to pay their respect to the village shrine, the God of War, to offer thanks for health and happiness. Dressed in her ceremonial kimono with the family crest, Waka walked under the big, old stone Torii, a sacred shrine entrance. She prayed for a long time. She had nothing in particular to wish for—nothing to pray for—only her hands were clasped in silent prayer.

The Arata "God of War" Shrine has a history. The present shrine was built by Takashima Shimazu, the fifteenth lord; however, the consecration was supposed to have taken place far back in the olden times. In those days the festival day of September 23rd, the annual function of "Festival on the Shore" was an eventful day in Kagoshima. But now, such festivals are not held. Only one belief remains—that the white sand under the treasure shrine protects one from a viper. So it is written in an ancient book of this locality.

"As this shrine hates vipers, none of them exists in the Arata Village." The villagers' respect for this tutelary deity, God of War, Hachiman, was very deep and when Masato became a naval officer later, he never forgot to pay homage to the God at every leave of absence.

At the age of five, on the Shichigosan celebration day, Masato was again taken to this shrine, dressed in a black cotton ceremonial kimono with the family crest.

Masashiko died three months after his birth and the eighth son, Suelo (meaning the last son) was born in that same year, the last child born to Waka.

By the time Masato was seven years old, many changes had taken place. The great earthquake in 1923 did huge damage to the Kanto District. In Tokyo, radio had been introduced, and before that, two large warships "Mutsu" and "Nagato" had appeared

on the sea.

B. The Last Testament By Captain Sakuma The History of Blood and Tears :

Salvaging operations began at once in the face of indescribable difficulties.

It was 1 o'clock p.m. on April 17th, 1910, that the No. 6 was pulled to shore and placed in dry-dock. Needless to say, there was almost no hope of finding any survivors. The only question was, in what manner had the crew met death in this first submarine disaster of the Imperial Navy.

As a matter of fact, just prior to this catastrophe, a similar accident had occurred in the navy of a foreign country. When the disgraceful behavior of that panic-stricken crew had been revealed—the men all deserting their posts to crowd around the hatch in an effort to escape death—the whole world had frowned.

So it was with some misgivings not unmixed with a feeling of deep sympathy for those who died, that Commander Yoshikawa and First-Lieutenant Nakashiro, ordered to investigate the inside of No. 6., entered the scene of tragedy. However, to their great joy and relief, they encountered no such disgraceful scene as they had anticipated. In fact, so admirable was the sight which met their eyes that these two men spontaneously shouted: All's well!"

There were no signs of panic at all. Each man had remained at his post to the last. First-Lieutenant Sakuma, the captain, was found dead in the conning-tower; Engineer Sub-Lieutenant Harayama by the electric moter-engine; Engineer Warrant Officer Suzuki, the navigator, by the steering gear. All had died a most heroic death. Only two of them, Sub-Lieutenant Hasegawa and Superior Warrant Officer Kadota were away from their posts. But their bodies were found near the place where the gasoline pipe had been broken. Those two had evidently left their posts to go and attempt to stop the flow of gasoline, and had suffocated to death.

As their gaze fell upon this scene, so eloquently revealing the heroic death of each and every man, the tears flowed down unchecked from the eyes of Commander Yoshikawa and First Lieutenant Nakashiro.

"All's well!"—simple and brief though these words were, they covered all that filled the minds of the Commander and the First Lieutenant as they witnessed the never-to-be-forgotten scene down in that luckless No. 6.

Each of the brave officers and men who had died so heroically, was covered with a blanket and taken on board the 'Toyohashi'. Without shame, the crew of that ship wept as they dressed each of the fourteen in a new uniform. When the 'Toyohashi' quietly entered Kure Harbor with its sad burden, all available vessels by special order of the Commander-in-Chief, were out to pay their deepest respects.

A note which was found in Captain Sakuma's pocket called forth little notice at the time, for it was believed to be a private letter to his family. However, it was soon revealed to be a document vividly describing in detail the operations of No. 6 from the time it submerged until its tragic end. It was truly the greatest testament known in history! Indeed, so vividly did it reveal the victory of the men's sense of duty over fear

of death that, to the readers, it was difficult to believe such a document could have been written under those circumstances.

As the submarine began to sink, the lights had gone out. By the faint glow that came through the peep-hole, First-Lieutenant Sakuma, panting and gasping for breath, in the gas-filled room, had finished his immortal document. In detail, he had written the cause of the submersion, giving his observations and impressions clearly that, in future, such tragedies might be avoided. To the last, his sense of duty and love for his subordinates and deep respect for his seniors—all were most clearly expressed. He was, indeed, a 'super-man.' At the time of his death he was only 31 years old. Since his wife had died one year before, he was survived by his two-year-old daughter.

His immortal testament read as follows ;

"I have no words to express my apologies for damaging His Majesty the Emperor's vessel and causing the death of my subordinates by my carelessness, I am happy to tell you, however, that every member of my crew remained faithful to the last, bravely and calmly fulfilling their respective duties. Our only regret is that the world may misunderstand this disaster and come to regard the undersea craft as not worthy of further experiment. We sincerely hope that regardless of this disaster, you will continue to study and do your best to develop and improve the submarine. This is our one and only wish. If this wish is carried out, we have nothing to regret, for we have died for our country.!"

A. The cause of submersion :

When we tried to submerge, we went down too deep, so it was too late for us to shut the sluice-valve. Moreover, the chain was cut in half. Though we tried to shut it by hand, the water had already filled the rear part of the boat. It sank at a slant of 25 degrees.

B. The situation after submersion :

The inclined angle of the elavation is about 13 degrees. As the switch-board got wet, the lights went out, the cable burnt up, and bad gas was generated. It is difficult to breathe. We went down at about 10 a.m. In the midst of this suffocating gas, we are trying to discharge water with the hand pump.

Upon submersion, we emptied the main tank. Though the lights were out, making it difficult to see the gauge, we realized we had finished emptying the main tank. We cannot use the electric current at all. The electrolyte overflowed, but only a little. The sea-water is not coming in. Chlorine has not been generated yet. There is only about 500 pounds of air left. Our only hope is the hand-pump. (Written by a faint glow from the conning-tower. Time ; 11 ; 45 a.m.)

Our clothes are wet. It is cold. A submarine crew must be able to act bravely as well as composedly and carefully. Without bravery, we cannot endure these hardships. I have always warned the men that they should not be overcome by difficulties in excess of circumspection. Though the world may laugh at my failure, I still believe that I have not been mistaken in these words of mine.

The sea-gauge at the conning-tower shows 52. Though we tried to empty the water, it did not move even by 12 o'clock. As the depth is about ten fathoms here, this is natural.

It is necessary to choose candidates for submarine crew from among the excellent of the most excellent, both in mind and body. Otherwise, at a time like this we would be faced with additional difficulties. Luckily, every member of this crew is carrying out his duty well. I am very pleased with my men. I did not expect to return home alive. For that reason, I left my last will in the drawer of my desk in the 'Karasaki.' It is unnecessary to say anything about my private affairs. Mr. Taguchi and Mr. Asami, please take my will to my father.

Public Testament :

Reverently, I beg His Imperial Majesty's favor not to leave the bereaved families of my subordinates in distress. This is my only desire.

Please extend my best regards and gratitude to the followings.

1. Minister Saito-(Author's Note ; the names of his seniors omitted).

Atmospheric pressure has risen, and I feel as if my tympanum were going to be ruptured.

(The names of a few more of his acquaintances were added here).

12;30. I feel much difficulty in breathing. I thought I had stopped the leakage of the gasoline, but I am getting intoxicated with it.

1. Commander Nakano (Author's Note ; This was, in all probability, added as postscript to the names of his seniors).

It is now forty minutes past twelve."

So ended the last testament.

執筆者紹介（目次順）

岩本經丸	教授	長 倫 理 学
近藤久美子	教授	英 米 文 学
中尾堯	助教授	日 本 学 史
岡本天晴	講師	哲 学
田所政江	講師	美 術 史
田島富美江	助教授	英 語 学

論叢（第三卷）

昭和四十六年十二月十五日 印刷
昭和四十六年十二月二十九日 発行

発行者 東京立正女子短期大学

東京都杉並区堀ノ内二丁目四一―五
電話 代表（三二三）五一〇一

印刷所 株式会社早稲田大学印刷所
東京都新宿区戸塚町一五八

編集委員

庄司寿完
小林幹男
岡本天晴

Tokyo Rissho Junior College for Women

Ronso

Contents

Geschichte als zvsammengesetzt dialektische Entwicklungen der Menschenbeziehungen	Tunemaru Iwamoto
On "The Navy" by Toyoo Iwata	Kumiko Kondo
Women's Salvation according to Nichiren Teaching	Takashi Nakao
A Study on <i>Miao-fa lien-hua ching Yoh-wang pu-shas ben-shi pin</i> (妙法蓮華經藥王菩薩本事品) and the Suicides in the Lyoo Chao (六朝) Period	Tensei Okamoto
A Study on the Circular Shoulder-Ornaments of Bodhisattva Statues	Masae Tadokoro
A Study on the Use of Charts in Pattern Practices	Fumie Tajima
On "The Navy" by Toyoo Iwata (In English)	Kumiko Kondo